GOD EATER Links archetype.

首振 赤牛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ　Ｌｉｎｋｓ　ａｒｃｈｅｔｙｐｅ．

【Ｎコード】
Ｎ０４８５Ｑ

【作者名】
首振　赤牛

【あらすじ】
そう遠くない未来。未知の生命体「アラガミ」は、地球上の全てを喰らい、人類の行き場を奪っていった。それに対抗するべく、製薬会社フェンリルはアラガミと同じ細胞でできた生命兵器「神機」と、それを繰る「ゴッドイーター」を生み出し、滅び行く人類を救おうとした。
そして新たに造られた新型神機と、その適合者、澤吹キョウヤと蓮田セノ。彼らの描く物語。

バンナムのハイスピードアクションゲーム「ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ」、その内の「蒼穹の月」までのストーリーに沿って進む小説です。原作ストーリーを主軸として、オリジナル要素をあれこれ肉付けしてあります。

第一話　ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ（前書き）

初めまして、首振　赤牛と申します。あかべこです。初投稿作です。自己満足感が否めない、拙い文章で恐縮ですが、読んでいただければ幸いです。定期更新はできませんが、読者様の御目に留まる場に投稿したからには、必ず完結させますのでよろしくお願いします。

第一話　GOD　EATER

―――２０５０年、突如として地球上に現れた、「オラクル細胞」…。有機物、無機物はおろか、放射性化学物質、果ては核廃棄物すらも食料とするこの暴食細胞は、恐るべきスピードで進化を繰り返し、多様な生物体に分化し、瞬く間に世界中に広がった。この絶対的捕食者に、当時の人類の持つ兵器では全く歯が立たず、いつしか人々は、極東地方…、つまり旧日本に古来から語り継がれる八百万の神々になぞらえて、「アラガミ」と呼ぶようになった。人類のあらゆる文明はこのアラガミの前に、為す術もなく葬られて行った。

しかし、人類は滅びなかった。生き残った人々はアラガミに対抗するべく、私設防衛団体フェンリルを設立し、旧北欧地区の本部を始め、世界中に支部をおき、組織的な研究を開始した。そして、多くの犠牲を払いながらも、アラガミと同じオラクル細胞を組み込んだ、生ける兵器“神機”を開発。その武器を使い、アラガミから人類を守る者を、ゴッドイーターと呼んだ。

人類には強力な鉾ができたが、それを以てしても、アラガミを完全に消滅させることはできず、人類は未だ、荒ぶる神々の影に怯えながら生きていた…。―――

―――時は流れ、２０７１年、極東地区―――

ここもかつては東京と呼ばれた大都市。今はただ、アラガミに食い散らかされた大地や瓦礫の山、食べ残しのビル街が、墓標のように静粛に立ち並んでいるだけ。

ここら一帯の、新しい名前は『贖罪の街』。教会を中心とした居住区の周囲には、自衛のためのバリケードが、既に人影のなくなった今もそのまま放置されているが、アラガミには何の抵抗にもならない。そのバリケードすら、アラガミにとっては前菜に過ぎないのだから…。

今日も、アラガミが贖罪の街を闊歩する。鬼の面のような尻尾を持った、二足のアラガミが、群れを成して、他のアラガミの死骸を喰い漁っている…。そこに、また別の、虎のようなアラガミが現れ、二足のアラガミをなぎ倒し、それを喰い始めた。…そう、これがこの世界の全て。弱いものが強いものに喰われる。ただそれだけの、シンプルな社会の縮図。

それを影から見ていた、三人のゴッドイーター。アラガミが一匹になったのを見計らい、三人で強襲をかける。―――

苦もなく虎のアラガミを倒した三人。そのうちの一人が、自分の神機を高らかに掲げる。すると、柄の部分から、ぐちぐちと生々しい音を立て、形容し難い…強いて言うなら、生物の口のような物が現れた。…これが、神機の最大の特徴である、制御ユニット。神機の本体である。
ゴッドイーターはこの制御ユニットを用い、討伐対象のアラガミから、脳に相当する部位、“コア”を「捕食」、もとい摘出する。

「おっと、レアモノだな。」

コアを摘出したゴッドイーターがつぶやいた。

「やったじゃない、リンドウ。戦果は上々…ってやつね。」

銃型の神機を持った女性のゴッドイーターが投げかける。どうやら、この手のアラガミは朝飯前のようだ。

「またサカキのオッサンがはしゃぎそうだ。」

「あとは早く人手が増えてくれるとありがたいんだけど…。
さあ、帰りましょう。お腹すいちゃった。今日の配給、何だったかしら…。」

「うん？確か、この前の食糧会議で言ってたな…。確か…ああ、新しい品種のトウモロコシだ。」

「えー、またあのでかいトウモロコシ？あれ食べにくいんだよね…。」

「このご時世だ、食えるだけありがたいと思えよ、サクヤ。」

「ねぇソーマ、何かと交換しない？」

「…断る…。」

「おーい、お前ら！置いてくぞー！」

「はいはい、もう…つれないわねぇ。」

「……。」

そんな会話をしながら、三人は軍用車両に乗り込み、戦場を後にした。

リンドウ、サクヤ、ソーマ。フェンリル極東支部において、最強と謳われる第一部隊だ。

所変わって、フェンリル極東支部、支部長室。そこに居るのは、ヨハネス・フォン・シックザール。言うまでもなく、彼がこの極東支部の支部長である。
彼の卓上には、パソコンが一台。その呼び出しのアラームが鳴った。

「支部長、照合中のデータベースから新型神機使いの適合候補者が二名、見つかりました。」

「二名も？ふふ、そうか…。名は何と言う？」

「澤吹キョウヤ、及び蓮田セノ。両名とも年齢は１９歳です。」

「ふむ…早速適合試験を受けて貰うとしよう。」

ヨハネスは腰を上げ、試験場の監視室へ向かった。

―――ここはフェンリル極東支部、通称アナグラ。極東に住まう人類をアラガミから守る、ゴッドイーターの拠点である。

そこに、二人の男女が招集された。
彼らが、新型神機の適合候補者と言うわけだ。

「ど、ど、どうしよう、キョウヤ…。」

「オドオドすんなって、セノ！もっと自分に自信を持てよ！これで、アラガミから家族を守れるんだぜ！」

「あ、候補生の方ですね！」

受付の女性が、二人に声を掛ける。

「いやぁ、こいつ怖じ気づいちゃって…。」

「だってぇ…。」

「私は竹田ヒバリと申します。大丈夫ですよ、検査は簡単に終わります。リラックスして下さいね。右手の階段を上がって、区画移動用エレベーターで地下5階の、訓練場へ向かって下さい。そこで検査を行います。」

ヒバリはにっこり笑って見せた。

「ありがとうございます。さ、行こうぜ。」

「う…うん。」

地下5階に着くと、そこには黄色い服を着た少年が座っていた。

「お？アンタたちも適合候補者？」

「アンタたちも…ってことはお前も？」

「うん、先に検査受けてきたぜ！なぁに、一瞬だよ、一瞬！」

「ふーん…、と、俺が先みたいだな。」

見ると、訓練場の入り口の電光掲示板に二人の名前と、この少年のものであろう、藤木コウタと言う名前が表示されていた。

「じゃあな、セノ！お先ー！」

「あ…うん、ガンバってね。」

訓練場の入り口は重い扉の二重構造だった。中はかなり広く、壁にはフェンリルのエンブレムがあり、所々に銃痕や斬りつけた跡があった。

入り口から見上げる位置に窓があり、そこに数人の検査員がいた。

更に部屋の中央には、なにやら怪しい装置が…。

「ようこそ、人類最後の砦、フェンリルへ。」

場内のスピーカーから、壁の向こうの検査員のものであろう声がした。

「今から対アラガミ討伐部隊、ゴッドイーターとしての適性試験を始める。」

見慣れない場所に、怪しい装置。さらに数人に見られていることもあり、キョウヤは緊張していた。

「緊張しているね。少しリラックスしたまえ。その方が、いい結果

が出やすい。心の準備ができたら、中央のケースの前に立ってくれ。」

キョウヤは深呼吸した。

（ケース…？明らかに何か挟む装置じゃないか…。アルコールパッチテスト程度だ？これのどこが…。）

疑り深くなっていたキョウヤだが、ついさっきの少年…コウタも、何食わぬ顔をしていた、大したこと無いだろう、と考え直し、再び深呼吸をして、装置の前に立った。

「その窪みに腕をを添えるようにして、神機の柄を握ってみてくれたまえ。」

キョウヤは、恐る恐る、言われた通りに腕を置いた。

すると突然、装置の上部が降りてきて、案の定、腕を挟み込まれた。

「う、うわあぁっ！？」

腕に激痛が走る。何か、グチャグチャ音が聞こえる。

「ううっ…！」

しかし、それは数秒もすれば終わり、すぐに装置は開いた。そこには、特に何が変わったでもない、自分の腕が、神機の柄を握っていた。変わった所といえば、ちょっと取れそうにない赤い腕輪がついたことくらいだった。

「…ってぇ〜…。何が起こったんだ…？」

そう呟いて、キョウヤは神機を掲げてみた。すると、神機から、触手のようなものが伸び、腕輪の端子のような部分に刺さった。今度は注射のような痛みと、手に違和感が走った。

「おめでとう、君がこの支部初の新型ゴッドイーターだ。」

スピーカーから音声が流れる。

「適性試験はこれで終了だ。次は適合後のメディカルチェックが予定されている。始まるまで、扉の向こうの部屋で待機してくれたまえ。気分が悪いなどの症状がある場合は、すぐに申し出るように。」

「わ、わかりました！」

どうやら適性試験は終わったようだ。何か、騙された感じがしたが、確かに一瞬だった。キョウヤはあれこれ考えないことにした。考えてたら、身が保たないと、そう思った。

「よっ！お疲れっ！」

外に出ると、コウタとセノが並んで座っていた。

「ああ、…うん、大したこと無かったな。」

「一瞬だったろ？」

コウタがにまっと笑う。

「ああ、まぁな…。」

「だ…大丈夫？何ともない？」

「おう、元気だよ。ちょっとびっくりしたけどな。」

「び、びっくりするの？？うぅ…やだなぁ…。」

「だーいじょうぶだって、セノちゃん！頑張れ！」

「うん…。」

セノが重い腰を上げる。

「それじゃ…行ってきます…。」

「行ってらー！」

セノを見送って、キョウヤはコウタの隣に腰を降ろした。コウタは足をぶらぶらさせて、ガムを食べている。

「そうだ、キョウヤ…でいいかな。ガム食べる？」

そう言って、ポケットの中をまさぐるコウタ。

「…あ、切れてた。今食べてるので最後だったみたい。」

「お前…これ見よがしに食っといて…。」

「いやぁ、ガムだって滅多に手に入らないしさ。ごめんごめん。…で、キョウヤも適合者なんだろ？オレと同じか、少し年上っぽく見えるけど。まぁ一瞬とは言え、オレの方が先輩ってことで！よろしく！」

「そうか。じゃあ頼りにしてるぜ、コウタ先輩。」

「因みに、本当はいくつなの？」

「１９だよ。」

「うえぇっ！？オレより４つも年上かよ！」

「コウタも新型神機使いなのか？」

「ん？いや、オレはフツーの銃型神機だったよ。いいよなぁ、新型。変形するんだろ？カッコイイじゃん！」

「いや、俺も試験終わったら神機回収されちゃったしなぁ。」

「ま、これからイヤになる程触るんだし。…でさぁ、ねぇ、セノちゃんとは知り合いなの？」

「ん？知り合いというか、幼なじみだ。実家が近くてね。」

「いいなぁ～！あんなカワイイ子と幼なじみなんてなぁ！」

「そんなもんか？」

「そういうもんだろ！？くぅ～！うらやましいぞぉ、キョウヤ！」

「ハハ…。…でもなぁ。あいつがゴッドイーターになるなんてな…。」

「ん…、そうだね…。なんか、向きじゃない感じだよね…。」

「…ああ。あいつ、やっていけるだろうか。虫も殺したことないんだぜ。おまけに、ビビりで泣き虫でさ。」

「ふぅん…。でも、まぁ、セノちゃんがピンチになったらオレが助けるし、大丈夫！」

「…ははは、そうしてくれると助かるよ。ついでに俺も助けてくれよな、コウタ先輩。」

「お前は自分の身は自分で守れよー！」

「おい、先輩！」

笑い合う二人。だが、その笑い声は警報にかき消された。

第一話　ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ（後書き）

キャラクター紹介をすることで、内容のネタバレになってしまうのは、心がモヤモヤっとする（私の主観ですが）かもなので、その話ごとのあとがきで、軽くキャラクター紹介を挟みたいと思います。あと、本格的に話に絡んでくるまで紹介は伏せておこうと思いますので、先ずは以下三人をば。

澤吹キョウヤ（１９）
新型神機適合者候補として、フェンリル極東支部に配属された。セノに対して過保護気味。

蓮田セノ（１９）
新型神機適合者候補として、フェンリル極東支部に配属された。キョウヤの幼なじみ。かなり引っ込み思案。

藤木コウタ（１５）
旧型神機適合者の少年。キョウヤやセノと同期になる。バカっぽい。

第二話　Seno's dispotism.（前書き）

キョウヤたちの神機の紹介は、いずれ行う予定です。

第二話　Seno's dispotism.

突然、場内に鳴り響く警報。

「なっ、なんだぁ！？アラガミか！？」

うろたえるキョウヤとコウタ。鳴り響くサイレンに乗せて、アナウンスが聞こえてきた。

『第一訓練場にて、異常発生。周りにいる方は、至急避難して下さい。繰り返します。第一訓練場にて…』

「第一訓練場！？ここじゃないかっ！」

それを聞いた、キョウヤの目の色が変わる。

「なんだとっ！？じゃあ、異常って…！」

「まさか、セノちゃん！？」

キョウヤは訓練場の入り口に走る。力一杯に扉を開けようとするが、固くロックされている。

「ど、どうするの！？」

「決まってんだろ！セノを助ける！お前も手伝え！」

「手伝えったって…！あ！」

そのとき、コウタは扉の外側に設置された開閉装置に気付いた。それに駆け寄り、解錠ボタンを押す。
扉がゆっくりと開き、キョウヤとコウタは中に駆け込んだ。

二人の目の前には、右腕をオラクル細胞に侵食されたセノが、窓の方を睨んで跪いていた。

「うわあぁあぁぁっっ！！だいじょうぶだっていったのにいいいぃいい！！いたい、いたい、いたいいたいいたいよおぉぉおおぉっ！！」

セノは、咆哮に似た悲鳴を上げた。キョウヤですら、こんなに怒り狂ったセノを見たことがない。

「君たち！何故入ってきた！警報が聞こえなかったのか！」

スピーカーの声が、キョウヤとコウタに言った。

「早くここから離れろ！この子の適性試験は失敗だ！」

「失敗！？どういうことですか！？」

「ゴッドイーターが付ける腕輪には、ゴッドイーター本人が神機の持つオラクル細胞に喰われないようにするための機能がある！神機を触った手に、腕輪が無ければオラクル細胞に喰われてアラガミ化してしまうんだ！」

見れば、セノの腕には腕輪が無い。腕輪の装着時に、驚いて手を退

いてしまったのだろう。

「セノ！腕輪を付けろ！アラガミになっちまうぞ！」

「いたい、いたい！いたいのは、いやぁあ！」

セノはあろうことか、キョウヤたちに襲いかかってきた。

「ひいぃっ！」

慌てて避けるコウタとキョウヤ。セノの腕は、思いっきり壁を叩いた。１９歳の女の子のはずなのに、壁はぼっこりとへこんだ。

「いかん、扉を閉めろ！」

「しかし、適合者の二人は！？」

「残念だが仕方あるまい！施設内で被害を出す訳にはいかん！それに…成功は望めないが、策がある！」

「…はい！」

「おい、少年！キョウヤ君、と言ったか。彼女をケースまで誘導して、腕輪をはめさせる事はできるか！？ケースはこちらで開ける！」

「う…難しいがやるしかないか…。やってみます！」

「頼んだぞ！君たち三人を救うにはそれしか方法が無い！」

その音声が終わると、ケースが一度、床の下まで降りていった。

「コウタ！そういう事だから、逃げ続けろ！」

「そんなこと、言われなくても！」

二人に、再びセノが襲いかかる。

「うわあぁっ！うそつきいいいいっ！！」

「嘘じゃない！本当に大丈夫だから！腕輪を付けるんだ、セノ！」

セノはキョウヤを狙って腕を振り下ろした。寸でのところで避ける

キョウヤ。

「セノちゃん、落ち着いて！」

コウタも呼びかけるが、セノは一向に攻撃の手を休めない。

しばらくして、ようやくケースが開いて戻ってきた。

「二人とも待たせた！後は君たち次第だ！」

「よし…セノ！こっちだ！」

「その！うでわを！つけたら！また！いたいんでしょう！！」

「大丈夫だ！すぐ終わるって！少なくとも、今の状態よりずっと痛

くない！」

「うううぅぅうぅうーー…！！」

「セノちゃん！ホント！マジ！大丈夫だってほら！オレとお揃い！」
恐怖で顔が引きつったコウタが、精一杯の投げかけ。しかし、セノはコウタを睨みつける。
「ぅぅぅぅうるさいいいいい！！」
セノはコウタに狙いを付け、走り出した。
「ごっ…ごめんなさいっ！」
「コウタ、伏せろ！」
セノが右腕を振り上げるのと同時に、キョウヤがコウタの頭を押し付ける。
振り下ろした腕を、キョウヤは両腕で掴んだ。
「捕まえたぜ、泣き虫！」
「！！」
キョウヤたちの後ろには、あのケースがあった。
「今です！ケースを！」
勢いよく閉じるケース。今度は、しっかりとセノの腕を巻き込んでいる。
「ぐぅっ…！」

セノの顔が、痛みに歪む。

「大丈夫だ、今度は俺も、コウタもついてる。少し落ち着いて、我慢しろ。」

セノの腕を押さえたまま、キョウヤがセノに優しく呟いた。

数秒後、ケースが開いて、セノの腕にはしっかり腕輪が装着された。セノの腕を侵食していた真っ黒で刺々しいオラクル細胞も、徐々に退いていき、しばらくしたら普通の、細くて白い女の子の腕に戻った。

「ほら、大丈夫だったろ？」

「…ふ…ふえぇぇえん…」

痛みがほぐれて緊張が切れたのか、セノはその場にへたり込み、力無くべそをかきはじめた。さっきまで大暴れしていたのが、まるで嘘のようだ。

「おお…オレ、生きてる…。」

コウタの顔は、まだ引きつっていた。

「…ふぅ…。何はともあれ、事なきを得て良かった。本来なら、君たち二人は懲罰房行きだが、入隊初日だし、仲間を救ったので目を瞑っておこう。ようこそ、フェンリル極東支部へ。色々あって疲れただろう。扉の外で、しばらく休んでくれ。しつこいようだが、気分が悪いなどの症状が出たら、すぐに申し出るように。」

訓練場の入り口が開き、外へ出られるようになった。キョウヤはへたり込んだセノの頭を撫でてやった。
「ほら、もう大丈夫だ。立てるか？」

「…うん…。」

「よし、じゃあ…」

キョウヤの服の裾を、コウタが引っ張る。

「ごめ…オレが立てない…。」

「やれやれ…この先輩は…。」

「ごめんね、今まで黙ってたけど、わたしって情緒不安定気味なんだ…。」

「へえ…、通りで…。」

「そんな事、なんで今まで黙ってたんだ？」

「だって…言う必要も無かったでしょ？普段はそういうことは無いし、こんなに取り乱したのは、久しぶりだし…。」

「ああ…、そう言えばそうだな。そうか、そう言う事だったのか。」

「え？何？昔にもあったの？」

「……。」

コウタの質問に、セノは悲しげな顔で俯いて黙り込んでしまった。

「あ…、コウタ、察してくれ。また機会があったら話すから。」

「！…そうか。ごめん。悪い事、聞いたかも…。」

「ううん、大丈夫…。」

「あ、あ、そうだそうだ！二人ともさ、バガラリーって知ってる！？旧世代のアニメなんだけどさ！すんげー面白いんだよ！そんでさ…」

沈んだ二人を見かねて、コウタが切り出した。これがコウタなりの思いやりなのだろう。

しばらくすると、真っ白なスーツを着た女性が、三人の元へ近付いてきた。

「立て。」

「へ？」

あまりに突然の命令に、三人は目を丸くした。

「立てと言っている！立たんか！」

相変わらず強い命令口調に、思わず姿勢を正して立ち上がった。

「これから予定が詰まっているので、簡潔に済ますぞ。私の名前は雨宮ツバキ。お前たちの教練担当者だ。この後の予定はメディカルチェックを済ませた後、基礎体力の強化、基本戦術の習得、各種兵装の扱いなどのカリキュラムをこなしてもらう。今までは守られる側だったかもしれんが、これからは守る側だ。つまらないことで死にたくなければ、私の命令には全てイエスで答えろ。いいな？」

「はい。」

ツバキはつらつらと、教科書でも読み上げるように一気に要件だけ伝えた。キョウヤは返事をしたが、コウタやセノは、あまりの情報量に脳がついていけず、混乱していて何も言えなかった。

「そこの二人！分かったら返事をしろ！」

「はいっ！」

「早速メディカルチェックを始めるぞ。まずは…」

ツバキは手にした書類をパラパラめくると、キョウヤの方を向いた。

「澤吹キョウヤ、お前からだ。ペイラー・サカキ博士の部屋に、一五〇〇までに集まるように。」

「了解しました。」

「それまで、施設を見回っておけ。今日からお前たちが世話になる、フェンリル極東支部、通称アナグラだ。メンバーに挨拶の一つもしておくように。」

「あの、オレたちは…。」

「ん、藤木コウタ、お前は一六〇〇、最後に蓮田セノ、一七〇〇時に同室へ集合だ。時間には遅れないように。以上だ。」

本当に要件だけ伝えて、ツバキは行ってしまった。

「ふいー…、おっかねー。鬼教官だよ、鬼教官！」

「厳しい教官か…、何か軍事組織って感じだな。」

「うーん…トレーニングもしなきゃいけないのかぁ…。運動苦手なのに…。」

「でも、ツバキさんキレイだったなぁ…。」

「コウタ…、お前の頭ン中は女性の事しか考えてないのな…。」

「そっ…、そんなことないやい！！」

「ふふふっ…、さて、アナグラのみんなに挨拶しなくちゃね。」

「ああ、そうだったな。ここやたら広いから骨が折れそうだ…。」

第二話　Ｓｅｎｏ'ｓ　ｄｉｓｐｏｔｉｓｍ.（後書き）

雨宮ツバキ（２９）
大尉。かつてフェンリル極東支部の実働部隊のリーダーを務めた元神機使い。現在では第一部隊、及び防衛班の現場指揮や新兵の教練担当を兼任する。

第三話　Ｍｅｄｉｃａｌｃｈｅｃｋ．（前書き）

少し開いてしまいましたが、第三話です。

第三話　Medicalcheck.

アナグラにいるメンバーに、軽くだが一通り挨拶を済ませたキョウヤたちは、メディカルチェックの時間まで、自室で待機する事になった。
ゴッドイーターは、いつ緊急出動命令が出ても良いように、休暇以外はアナグラの居住区で過ごす事になる。そのため、新人にも部屋が支給される。
部屋には、ソファやベッド、流し台などの一般の日用品と、ターミナルと呼ばれるコンピューターが備え付けてある。ゴッドイーターたちは、このターミナルを使って、メールの送受信、衣服や武器の注文、データベースである“ノルン”の閲覧などを行う。
ツバキの命令は、メディカルチェックが始まるまでは、自室のターミナルで、各種兵装の扱い方等のチュートリアルを見て、予習をしておくように、とのことだった。

コウタやセノと別れた後、キョウヤは命令通り、チュートリアルを眺めていた。
退屈して、ウトウトし始めた頃、ドアをノックする音が聞こえた。

「はい、どちらさま？」

ドアの外には、顔や着ている服が、油で汚れた少女が立っていた。

「ああ、リッカ…だっけ。どうしたの？」

楠　リッカ。フェンリル極東支部における、技術整備班に所属する少女である。彼女たちの手によって、全ての神機が整備・製作・修理されている。

「ん…、大した用があったワケじゃないんだけど…。もう直ぐキミのメディカルチェックの時間じゃない？近くを通りかかったから、ついでに呼びにきたよ。」

時計を見れば、もう１４：３５になるところだった。

「うわっ！もうこんな時間かよ！ありがとうリッカ、危うく寝ちまうとこだった。」

「それは良かった。あたしも整備場まで向かうとこ。途中まで、一緒に行こうよ。」

「ああ、少し待っててくれ。」

キョウヤはターミナルの電源を落としに行った。すると、さっきまで気付かなかったが、自分宛てにメールが来ていた。

コウタからだ…。

『件名：改めて、よろしくな！

本文：ところでさ、オレのメディカルチェックっていつから始まるんだっけ？

確かツバキさんがオレに言ってた気がするんだけど、思い出せないんだよなー。

聞きたいけど、あの人なんか怖いし…。』

（あいつ、何やってんだ…。ま、時間はまだだし、送っておいてやるか…。）

キョウヤは、簡単にメールを返し、ターミナルを切って外へ向かった。

「お待たせ。さあ、行こうか。」

「新しい住居はどう？慣れそう？」

「かなり快適だ。でも、あのターミナルってのはどうにも慣れないなぁ…。予習するまでに時間がかかったよ。」

「チュートリアル見てたんだ。真面目だね。」

「まあな。それに、死にたくねえし…。あと、コウタ…新人のうちに一人、黄色いヤツがいたろ？あいつが、メディカルチェック忘れたってメールが来てた。」

「ふふっ…。彼はねぇ、ちょっとバカっぽかったからねぇ。賑やかになりそうだ。」

「確かにアイツはバカに見えるよなぁ。」

区間移動用エレベーターまで来ると、キョウヤがまだ会ってない少年がいた。

「あれ、防衛班、帰って来てたんだ。お疲れ様。」

「おうリッカ、お疲れー。…と、そっちは誰だ？見ない顔だな。」

「今日、配属された新人君だよ。」

「澤吹キョウヤって言うんだ。よろしく。」

「ああ、そういや言ってたな。俺は小川シュン。よろしくな。神機使いは大変だけど、お前もまあ、死なない程度に頑張れよ。命あっての、ものだねだからな。」

「また報酬、少なかったんだね。」

「そうなんだよ！神機使いが優遇されてるとはいえ、これじゃ割に合わねーよ！配給の質も落ちてるし！」

「こんなご時世だからね。仕方ないよ。じゃ、またね。」

「おう！」

エレベーターに乗って、研究室は地下４階、整備場は一階にあるらしい。居住区は地下８階にある。

エレベーターから降り、リッカと別れたキョウヤだったが、辿り着いた地下４階は、幾つもの研究室があり、どれが博士の部屋か分からない。

（しまったな…、リッカに聞いとけば良かった…。）

そう思いながら進んで行くと、廊下の長椅子に、桃色の髪の少女が座っていた。腕輪を付けていることから、彼女がゴッドイーターだと分かる。

「あ…はじめまして…？」

キョウヤを見つけた少女は、オドオドと挨拶した。

「さっき一通り挨拶に回ったんだがな…、悪い、見つけられなかったみたいだ。今日配属された澤吹キョウヤだ。よろしく！」

「ああっ、新人の方ですね！三人新しい方が来るって言ってたっけ…。私は防衛班第二部隊所属の台場カノンと言います。よろしくお願いします！」

「防衛班…そうか、どうりでさっきは見つけられなかったワケだ。」

「さっきまで任務に出てましたからね。でもじゃあ、今からメディカルチェックですね！廊下のつきあたり、サカキ博士のラボですよ。」

「つきあたりか…。ちょうど迷ってた所なんだ、助かるよ。」

カノンはにっこりと笑った。

「博士は、ちょっと変わった方なんですけどね。あ、でも！とても優しい方なんです！大丈夫ですよ！」

「そうかなのか…。教えてくれてありがとう！また後でな！」

「はい～。」

カノンに見送られ、キョウヤはさらに奥へと進んだ。

つきあたりには、確かに『技術局長室』『ノックしてね☆』と書いてある部屋があった。

（確かに…、変わった人なんだなァ…。）

胡散臭さを感じつつも、キョウヤはそのドアをノックした。

「失礼します、新人の澤吹キョウヤです。メディカルチェックを受けに来ました…。」

「は～い！いいよ、入って！」

中から高い男性の声が答えた。
キョウヤはそのドアを開けた。

中は案外普通の部屋だった。部屋の中央に、複数のモニターを備えたコンピューターがあり、そのキーボードをせわしなくタイプする男性と、その隣で後ろ手に腕を組む男性が目に入った。

「ふむ…予定より７２６秒も早い。よく来たね、“新型”君。私はペイラー・サカキ。アラガミ技術開発の統括責任者だ。以後、君とはよく顔を合わせることになると思うけど、よろしく頼むよ。」

「よろしくお願いします！」

「さてと…見ての通りまだ準備中なんだ。ヨハン、先に君の用事を済ませたらどうだい？」

サカキは、隣に立っている男性に声をかけた。話しぶりからすると、彼らは友人同士であろうか。

「サカキ博士、そろそろ公私のけじめを覚えていただきたい。」

話を振られたその男性は、少々呆れながら答えた。キョウヤはその声に聞き覚えがあった。…適合試験で、スピーカーから流れてきた、あの声だ。

「適合テストでは、色々あったがご苦労だった。私はヨハネス・フォン・シックザール。この地域ののフェンリル支部を統括している。改めて、適合おめでとう。君には期待しているよ。」

「あ、あの時はどうも…。おかげさまで、セノを助けられました。」

「いや、当然の事をしたまでだ。私としても、やっと見つけた貴重な新型適合者を、実戦前に失いたくなかったからね。」

「彼も元技術屋なんだよ。ヨハンも“新型”のメディカルチェックに興味津々なんだよね？」

ヨハネスの話しを切るように、サカキが口を挟む。

「…あなたがいるから、技術屋を廃業する事にしたんだ。…自覚したまえ。」

「…本当に廃業しちゃったのかい？」

サカキは、何か含みのある言い方で返した。そして、ヨハネスも、それを否定はしなかった。

「ふっ…、さて、ここからが本題だ。我々フェンリルの目標を改めて説明しよう。」

「はいっ！」

「君の直接の任務は、ここ極東地域一帯のアラガミの撃退と素材の回収だがそれらは全てここ前線基地の維持と、来たるべき『エイジス計画』を成就するための資源となる。」

「…この数値は…！」

サカキがモニターを見ながら叫んだ。

「…コホン、エイジス計画とは、簡単に言うとこの極東支部沖合い、旧日本海溝付近に、アラガミの脅威から完全に守られた『楽園』を作るという計画なのだが…」

「おおぉ～っ！」

再び、サカキが叫ぶ。

（…全く、この人は…。）

「この計画が完遂されれば、少なくとも人類は、当面の間絶滅の危機を遠ざける事ができるはず…」

「すごいっ！これが新型かぁ！」

「……。」

「…ペイラー、説明の邪魔だ。」

「ああ、ゴメンゴメン、ちょっと予想以上の数値で舞い上がっちゃったんだ。」

「ともあれ、人類の未来の為だ。尽力してくれ。…じゃあ、私は失礼するよ。ペイラー、後はよろしく。終わったらデータを送っておいてくれ。」

ヨハネスはそれだけ言うと、部屋を去っていった。
サカキはその姿を見送り、今までタイプしていた手を止めた。

「よし、準備は完了だ。そこのベッドに横になって。」

「…あの、メディカルチェックって何をするんですか？」

「何、大したことはしないさ。心電図を取ったり、採血したり…。要は健康診断みたいなものだよ。少しの間眠くなると思うが、心配しないでいいよ。次目が醒める時は自分の部屋だ。戦士の束の間の休息というやつだね。予定では１０８００秒だ。ゆっくりお休み。」

「分かりました。」

言われるがまま、キョウヤはベッドに身を横たえた。するとたちまち、睡魔が襲ってきた。

（ちょっと胡散臭いけど、これがアナグラ…か。悪くはないな…。）

そう思いながら、キョウヤは溶けるように眠りについた。

第三話　Medicalcheck.（後書き）

例によって、キャラクター紹介です。

楠　リッカ（１８）
亡き父親の後を継ぎ、神機のメンテナンスクルーとなった少女。好物は冷やしカレードリンク。

小川　シュン（１８）
第三部隊所属の神機使い。かなり生意気な性格だが、剣術の腕は確か。アラガミの討伐数にこだわる。

台場　カノン（１８）
みんな大好き、荒ぶる誤射姫。第二部隊所属。非戦闘時と戦闘時で、人が変わる。

ペイラー・サカキ（４７）
極東支部の技術開発統括責任者。フェンリル創設者の一人であり、神機の産みの親でもある。食えない性格。

ヨハネス・フォン・シックザール（４５）
フェンリル極東支部の支部長であり、フェンリル創設者の一人。アラガミ研究の第一人者で、人類救済のため「エイジス計画」を提唱している。

第四話　Ｆｉｒｓｔ　ｃａｍｐａｉｇｎ．（前書き）

まただいぶ開いてしまいました。このままでは更新ペースがどんどん遅れてしまう…。

第四話　Ｆｉｒｓｔ　ｃａｍｐａｉｇｎ．

…キョ……ヤ　……ヤ…

（……誰…？）

…キョ…ウヤ…　…キョウヤ…

（暗闇が眩しくて、前が見えないな…。）

た…キョウヤ…！

（さっきから、誰なんだ…？
……ダメだ、聞き取れない…。）

助けて、キョウヤ！！

キョウヤが目を覚ますと、まだ見慣れてない自分の部屋の天井が目に映った。
ドアを乱暴にノックする音も聞こえる。

「キョウヤー！起きろー！」

寝ぼけ眼を擦りながらドアを開ける。ノックをしていたのはシュンだった。

「やっと起きたなぁ、キョウヤ。ツバキさんに頼まれて、お前を呼びに来たんだ。」

「ツバキさんに…？ああ、もう次のカリキュラムか…。」

「多分、そういうこったろうな。とにかく、エントランスにいるツバキさんに話しかけろ。新人は頑張らないと、なかなか報酬を稼げないからな。まあ…頑張れや。」

「ああ、わざわざすまないな。すぐ行くよ。」

そのとき既に、キョウヤはさっき見た夢など忘れていた。

エントランスに行くと、受け付けの隣にツバキが立っていた。時計を見ると、１８：２４だった。

「メディカルチェックは終わったようだな…。よろしい、早速任務に就いてもらうことにしよう。隣に居るのが、ゴッドイーターのミッション情報処理を担当する、竹田ヒバリだ。」

キョウヤが目をやると、ヒバリはにっこり笑って手を振った。

「彼女からミッションを受注するように。その後、上階に設置されたターミナルで兵装を整えろ、いいな？」

「了解。」

「よろしい。新人のお前に、ちょうどいいミッションが入ってきている。オウガテイル一体の駆除だ。」

オウガテイル…。二足歩行で、鬼の面のような巨大な尾をもつ小型のアラガミである。多様性に富んでおり、今や世界中で最も個体数の多いアラガミで、他のアラガミの死骸を食べて生きている。アラガミの中ではかなり弱く、群でなければさほどの脅威は無い。まさに、新人にはうってつけの相手だ。

「一人でも問題無いとは思うが、念の為、インストラクターとして、雨宮リンドウ少尉をつける。期待しているぞ。」

「万事、了解しました。」

「それでは、ヒバリ、あとは任せたぞ。」

「はい。では、キョウヤさん。メディカルチェックお疲れ様でした！改めまして…、ミッション発注を管理する、竹田ヒバリと申します！色々と至らぬ点もあるかと思いますが…、今後ともよろしくお願いします！」

「ああ、よろしく。じゃあ、早速ミッションを受注しますかね。」

「はい！えー、旧市街地にてオウガテイル一体の排除…ですね。初陣ですけど、油断せずに頑張って下さい！」

「ありがとう。…で、一緒に行ってくれる少尉さんってのは…？」

「ああ、リンドウさんなら、しばらく前に任務から帰還されたので、間もなくいらっしゃると思いますよ。お掛けになって、お待ち下さい。」

「そう、わかったよ。適当にターミナルでも眺めてるわ。」

キョウヤはヒバリから、ミッションの半券をもらい、上階のターミナルを起動した。

（あ、セノからメールだ…。）

『件名：緊張するよぉ
本文：メディカルチェックを受けたのに、緊張して眠れない…！もう起きちゃったよ。
キョウヤはそろそろミッションかな？気を付けてね。』

（あの睡魔に勝るほどの緊張か…。どんだけビビってんだ。）

キョウヤはそのメールに返事を書いて送信すると、アラガミの項目を開いた。まだ、オウガテイルの項目にしか閲覧権がないようだ。

「あ、リンドウさん。支部長が見かけたら、顔を見せに来いと言っていましたよ？」

キョウヤがターミナルを見ていると、下の階からヒバリの声がした。

「O．K．　見かけなかったことにしといてくれ。」

「もう…。いつか大目玉もらいますよ？」

どうやら、待ちかねの少尉が来たようだ。キョウヤはターミナルの電源を落とし、下の階へ向かった。

「本日、配属されました澤吹キョウヤです。本日はよろしくお願いします。」

「お、よう新入り。よろしくな。俺は雨宮リンドウ。形式上、お前の上官にあたる…が、まあめんどくさい話は省略する。とりあえず、とっとと背中を預けられるぐらいに育ってくれ。な？…あー、あと、そう身構えなさんな。堅っ苦しいのは苦手なんでね。」

「そうですか。ふぅ。親しみやすそうな人で安心しました。」

「そう、そのくらい肩の力を抜いてくれりゃあ、こっちもやりやすい。」

「あ、もしかして新しい人？」

二人の会話を切るように、ドレスを着た女性が近づいてきた。背中が大きく開けていて、スカートにはスリットが入っている。この服で、戦闘に出るのだろうか…。

「あー、今厳しい規律を叩き込んでるんだから、あっち行ってなさい、サクヤ君。」

「了解です、上官殿。」

友人同士なのだろうか、二人は隔たりの無い会話をする。サクヤはキョウヤに手を振って、行ってしまった。本当に挨拶に来ただけのようだ。キョウヤは軽く会釈をして、サクヤを見送った。

「とまあ…そういうワケで…だ。早速お前には実戦に出てもらうが、今回の緒戦の任務は俺が同行する。」

「ええ、その件に関してはツバキさんから聞いています。」

「そうか、それなら話が早え。…と、時間だ。そろそろ出発するぞ。」

「はいっ！」

二人は出撃ゲートへ向かった。エントランスから繋がる出撃エレベーターに乗り、最上階を目指す。そして、その最上階には十数機の装甲ヘリが、出撃の時を待ち構えていた。

「お、来たな。」

エレベーターの出口で、中年の男が待ち構えていた。

「よう、オッサン！調子はどうだい？」

「その台詞はさっきも聞いたぞ、少尉。…で、お前さんは初任務か。キョウヤだったな？」

「先程は忙しい所を、すみません。」

彼は鈴鳴アキオ。リッカの上司であり、神機のメンテナンスチーフである。キョウヤたちが、挨拶まわりに行った時は、調度神機のメンテナンス中であったため、これが初対面だ。

「少尉、あんたの神機の調整はできてる。…が、無理はするな。俺たちの仕事をあまり増やしてくれるなよ。」

「ああ、わかってるさ。なぁに、今回はコイツのお守りだけだ、心配ない。」

リンドウは、ロックの外れている赤い鎖鋸の神機を手にした。アキオが別の神機のロックを外し、キョウヤを呼ぶ。

「さあ、お前さんの相棒だ。メンテはバッチリ、コンディションもご機嫌！まだテストでしか触ってないだろう？持って行きな！」

キョウヤは自分の神機に触ってみた。すると、神機からあの触手が伸び、再び腕輪の端子に刺さる。

「よろしくな、相棒。」

神機が喜んでいるような気がした。

「さて、新入り！行くぞ！」

「はい！」

二人はヘリに乗り込んだ。目指すは旧市街地、『贖罪の街』。

真っ白な砂しかない大地を進んでいく。

「そういえば、気になったんですけど。」

思い出したように、キョウヤがリンドウに話しかける。

「なんだ？」

「リンドウさんとツバキさんは、兄弟かなにかですか？二人とも、苗字が雨宮ですよね？」

「お、よく気付いたな！あんまり似てないだろう？」
リンドウは冗談っぽく笑った。
「姉上も元ゴッドイーターでな。昔はよく一緒に任務に出たもんだ。…ま、いずれ話す事もあるだろうさ。」
「神機使いのお二人さん！目的地が見えてきたぞ！準備は良いか？」
パイロットが到着を知らせる。
リンドウは、神機の入った起動制御ケースを掴み、窓から外を見た。
「今回は順調に航行できたな。新入り、心の準備はできたか？」
「…そう言われると、緊張しますよ。」
「はは、初陣だもんなぁ。慣れるしかないな。」
ヘリのハッチが開く。外から、プロペラの強い風が入ってきた。
「まさか、飛び降りるんですか？」
「そうだ。行くぞ！」
低く見積もっても高度２０ｍはあろうヘリのハッチから、躊躇なく飛び降りたリンドウ。地面に綺麗に着地した。
「い、行くしかないか！」

それに続いて、キョウヤも飛び降りた。

ヘリと別れ、徒歩でたどり着いた贖罪の街。キョウヤは、建ち並ぶビルを眺めた。

（昔は、ここも人がたくさんいたんだろうな…。）

「ここも随分、荒れちまったなぁ…。」

キョウヤと共に、リンドウが景色を眺めていたリンドウが呟いた。

（リンドウさんは、この街が生きてた時代を知っているのだろうか…。）

「おい新入り、実地演習を始めるぞ。命令は三つ。」

リンドウはキョウヤに向かって、三本指を立てた。

「“死ぬな”。“死にそうになったら逃げろ”。そんで“隠れろ”。“運が良ければ、不意を突いてぶっ殺せ”。」

指を一本ずつ折って、最後に一本足りない事に気付くリンドウ。

「…あ、これじゃ四つか…。」

「シンプルな命令ですね。」

「ま、とにかく生き延びろ。それさえ守れば、後は万事どうにでもなる。」

リンドウは神機を肩に担いで、再び街の方を見た。

「さーて、おっ始めるか！」

第四話　Ｆｉｒｓｔ　ｃａｍｐａｉｇｎ．（後書き）

キャラ紹介のコーナーです。またオリキャラでましたねー…。

竹田ヒバリ（１７）
アナグラの敏腕受付嬢。激戦区である極東支部の、任務発注管理や報酬支払処理などをたった一人でこなす、実は一番スゴい人。いつも眩しい笑顔をありがとう。

雨宮リンドウ（２６）
第一部隊のリーダーを務める、古参のゴッドイーター。階級は少尉。同行者の生還率は９０％を誇る。新米のインストラクターを任されることが多いのはこのため。歩く死亡フラグ。

橘サクヤ（２１）
リンドウから遅れること四年、２０６５年にフェンリルに入隊し、オペレーターからゴッドイーターに。狙撃手としての銃の制動力はもちろん、衛生兵としても抜群の働きを見せる。戦闘中に服が脱げないのか気になって仕方がない。

鈴鳴アキオ（５２）

極東支部における、神機のメンテナンスチーフ。つまり、リッカの上司。普段は陽気なオジサンだが、仕事後などテンションが低い時は機嫌も悪い。リッカの父親の同期らしい。「冷やしカレードリンク？嫌いじゃねえぜ？」

なんだか、どんどんキャラ紹介雑になってきてる…。

第五話　An ogre's tail.（前書き）

テスト期間中の投稿です。（勉強しろ）
戦闘描写って、難しいですね…。

第五話　An ogre's tail.

二人は教会の周りを探索する。情報によれば、今回はオウガテイル一体だが…。

「見つかる前に、先手を取れ。そんで、攻め続けろ。但し油断はするなよ。ヤツの尻尾の攻撃は、威力もあるし、範囲も広い。」

「もし、先に相手に見つかったら？」

「絶対に逃がすな。あ…、いや、深追いするのもいただけないが…。仲間を呼ばれると厄介だからな。」

「了解です。逃げ出したら、撃てばいいんですね。」

「あー、そうか、新型ってのは便利で何よりだ。」

リンドウが笑う。

大きな教会の聖堂を半分ほど廻ったとき、目的のアラガミが姿を現した。

―――オウガテイル。キョウヤは、こんなに間近で、このアラガミを見たのは初めてだった。小型のアラガミとはいえ、実際に見ると大きい。昔、本で見た、馬とかいう動物ほどの体格がある。はぐれアラガミだろう、周りに仲間の姿は見えない。オウガテイルは、散乱する瓦礫を大地ごと喰らっていた。

「よーし、新入り、アイツはディナーに夢中。チャンスだ。背後から近づいて、一気に押し切れ。うまくやれば、お前一人でも充分倒

せる。」

「ほ、本物はやっぱ違いますね…。デカい…。」

「なーに怖じ気づいてんだよ。大丈夫、あっと言う間さ。」

「そうであって欲しいです。…ふう…。…行きます…。」

キョウヤは呼吸を整え、やたらと鳴り響く鼓動を抑えながら、オウガテイルに近付く。

（…５０…４０…３０…）

頭の中で、敵との距離を刻む。五感を鋭く研ぎ澄ませ、オウガテイルの背後に付く。まだまだ、気付かれていない。

（３、２、…今だッ！）

自分のタイミングを合わせ、強く力を込めて、敵の首筋を刀身で捉える。

苦痛の叫びをあげたオウガテイルが大きくのけぞり、体勢を崩すが、大きな尻尾と強靭な脚で持ち直した。キョウヤを睨み付けて吼えるオウガテイル。

「ちっ…！浅いか！」

一度、敵と距離を取り、再び斬り掛かる。しかし、ブレードは空を斬った。敵も不意打ちのように、簡単には斬らせてくれないようだ。

「早いなっ！」

オウガテイルが尻尾を振り、先端の棘を飛ばしてくる。
キョウヤはそれをジャンプで避けると、自由落下を利用して、オウガテイルを斬り付けた。オウガテイルの頭が半分ほど割れる。

「やったか！？」

しかし、オウガテイルは倒れなかった。再びキョウヤを鋭く睨むと、尻尾をバネにして体当たりをかましてきた。

「くうっ！」

キョウヤは後ろに突き飛ばされた。すかさず、リンドウがフォローに入り、オウガテイルを刀身で抑えつける。

「ボサッとするな！一瞬の油断が命取りだぞ！」

相手はアラガミ。倒れるまで、油断はできない。リンドウがオウガテイルを押し離す。

「ありがとうございますっ！」

「ああ。とはいえ、アイツもかなり弱ってる。トドメも任せたぜ。」

「はい！」

キョウヤたちに背中を向け、裏路地へと走り出すオウガテイルに、キョウヤが追い討ちをかける。
神機を、刀身のブレードから、銃身のガットに変形させ、オラクル弾丸を撃ち込む。

弾はオウガテイルの脚を捉え、バランスを崩したオウガテイルがその場に倒れ込んだ。

「よし、いける！捕食形態！」

キョウヤの神機の、刀身の根元から、オラクル細胞の大顎が飛び出し、オウガテイルを捕食した。

「よし、ご苦労さん。」

神機を担いだリンドウが、動かなくなったオウガテイルに目をやった。

「どうだ？うまいこと喰えたか？」

「ええ、まあ…。多分。」

キョウヤが自分の神機を見せる。神機のコアユニットが弱く光っていた。

「上出来。初めてにしてはなかなかのもんだったな。点数を付けるなら…まぁ７０点くらいか。どーだ、感覚は掴めたか？」

「まだ不安が残るところもありますが…。戦場の雰囲気は確実に把握しました。」

キョウヤは苦笑した。正直、あまりに必死だったので、自分が何をやったのか殆ど覚えていないのが現状だった。今はただ、オウガテイルに突き飛ばされた時の痛みが残るばかりだ。

「充分だ。後は、アナグラで訓練をうけたり、任務をこなしていけば否応なしに慣れていくさ。さ、帰るぞ。帰るまでが任務だ。」

「はは、学校の先生みたいですね。」

二人は任務を完了し、贖罪の街を後にした。

アナグラに帰り着くと、アキオとツバキが待っていた。

「二人とも、ご苦労だった。」

「お疲れさん！キョウヤ、神機は使いこなせたか？」

「まだよく解りませんが…。まずまずです。」

「ま、無事でなによりだ！死んじまったら元も子もないからな！」

「おーい、新入り。帰ってきたらまず神機を返却するんだ。」
リンドウが自身の神機をもとの場所に戻し、ロックをかけながらキョウヤを呼んだ。
「自分の神機を触れるのは自分だけなんだ。他人が触ると神機に喰われちまうからな。」
「そうなんですか…。じゃあメンテナンスって…」
「専用の施設がある。直に触らないように専用のマニュピレータを使うんだ。メンテ中は捕食本能丸出しだからな。」
アキオがリンドウの神機を眺めながら答えた。キョウヤは自分の神機を、リンドウがしたようにロックをかけた。
「キョウヤ、お前は次のカリキュラムがある。」
ツバキが書類を捲りながら、キョウヤに言った。
「帰ってすぐにか…。ゴッドイーターって思った以上に大変だぁ…。」
「新人のうちはなぁ。短期間で戦力になってもらわんと困るからな。」
リンドウが意地悪くわらいながら、キョウヤの肩を叩く。
「無駄口を叩くヒマもないぞ。今からサカキ博士の研究室での講義を受けろ。だが、まぁ安心しろ、今日の予定は、一応これが最後だ。

」

「わかりました。リンドウさん、アキオさん、今日はありがとうございました！今後ともよろしくお願いします。」

「おう！困ったときは遠慮せず言えよ。」

キョウヤは会釈して、その場を後にした。

キョウヤが去った後、アキオはキョウヤの神機の損傷をチェックした。

「少尉、お前さん、今回はやけに甘く指導したんだな？」

「え？そうか？そんなつもりはなかったがなぁ…。」

「キョウヤの神機の損傷が、初陣にしては少なすぎる。」

「ああ、そういうことか。そりゃあアイツに才能があった印だよ。俺も今回は殆ど神機を使ってないよ。」

「そうか…。それならいいが…。あまり甘くし過ぎると、いい神機使いが育たんぞ。」

「俺は褒めて伸ばすタイプだよ、オッサン。」

―――サカキ博士の研究室。
キョウヤが部屋に入ると、セノとコウタは既に席についていた。
「お、来たね！」
「遅れてスミマセン。」
「キョウヤ、遅いよー！」
「任務だったんだ、仕方ねぇよ。」
キョウヤはコウタの隣に座った。
「お疲れの所悪いけど、私の講義に付き合ってくれ。」
サカキは、コンピューターに繋いだ大きな液晶画面を、キョウヤたちに見えるようにし、咳払いをして講義を始めた。
「さて、いきなりだけど…キミはアラガミってどんな存在だと思う？」
サカキはセノに問いかけた。
「えっと…、よく解らないけど、危険な生物…ですか…？」
「確かにそうだね。改まった言い方をすれば、“人類の天敵”“絶対の捕食者”“世界を破壊するもの”。まぁ、こんなところかな。これらは、認識としては間違ってない。むしろ、目の前にある事象を素直に捉えられていると言えるだろうね。
じゃあ、何故どうやってアラガミは発生したのか？って考えたこと

あるかい？」

「そんな、考えてもわからないですよ。現時点でも、詳しい発生原因が解らないのに…。」

セノが困ったように答える。

「うん。キミたちも知っての通り、アラガミはある日突然現れて、爆発的に増殖した。そう、まるで進化の過程をすっ飛ばしたようにね。」

「ふあぁぁぁぁ…。なぁなぁ、この講義、なんか意味あんのかな？アラガミの存在意義なんかどうでもよくね？」

コウタがあくびをしながら、小声でキョウヤに言う。しかし…

「そうかね？」

…サカキには聞こえていたようだ。

「うへっ！？」

「コウタ…。」

キョウヤは呆れたようにこぼした。セノもクスクス笑っている。

「アラガミには脳がない。心臓も、脊髄すらありはしない。」

サカキがコウタの頭を軽く小突きながら続ける。

「私たち人間は、頭や胸を吹き飛ばせば死んじゃうけど、アラガミはそんなことでは倒れない。実戦に出たキョウヤくんなら、わかるだろう？」

「ええ、首筋を斬りつけても、頭を割っても倒れませんでした。」

「実はアラガミは、考え、捕食を行う一個の単細胞生物、オラクル細胞の集まり…。そう、アラガミは群体であって、それ自体が数万、数十万の生物の集まりなのさ。そしてその強固でしなやかな細胞結合は、既存の通常兵器では全く破壊できないんだ。じゃあキミたちは、アラガミとどう戦えばいいんだろうね？」

サカキは今度は、コウタに問いかけた。

「えーと、それは…、神機でとにかく斬ったり撃ったり…。」

急に振られたコウタは、慌てながら答えた。

「そう。結論から言えば、同じオラクル細胞が埋め込まれた生体武器“神機”を使って、アラガミのオラクル細胞結合を断ち切るしかない。だがそれによって霧散した細胞群も、やがては再集合して、新たな個体を形成するだろう。彼らの行動を司る司令細胞群…、コアを摘出するのが最善だけど、これがなかなか困難な作業なんだ。」

サカキは液晶画面に、スライドを映し出した。アラガミのコアだろう、歪な球状の塊だ。

「神機をもってしても、我々には決定打がない。いつの間にか人々は、この絶対の存在を、ここ極東地域に伝わる八百万の神に喩えて、アラガミと呼ぶようになったのさ。」

サカキは画面を消し、液晶を片付け始めた。

「さて、今日の講義はここまでとしよう。アラガミについては、ターミナルにあるノルンのデータベースを参照しておくこと。いいね？」

「はい。」

「今日はもう遅いから、ゆっくり休んで明日からの任務に勤しんでほしい。じゃ、解散！」

そう言って、サカキは奥の部屋に消えた。コウタは伸びをして、眠そうにしている。

「お前、今まで寝てたんじゃないのか？よくこれ以上寝れるな。」

「勉強キライなんだよ。頭より体を動かしたい…。」

「わたしはこっちの方がいいな。運動苦手だもの。」

「ノートまでとってたの？セノちゃんはマメだねぇ。」

セノはニコッと笑った。

「それより、さっさと飯食って寝ようぜ。俺はもうクタクタだよ。」

「キョウヤ、実戦出たんだろ！？話聞かせてよ！」

「わたしも、聞きたい！」

三人はそんな会話をしながら、研究室を出た。

…今日から、三人の人類を守る戦いが始まる…。

第五話　An ogre's tail.（後書き）

今回は新キャラいません。珍しい。
強いて言うならオウガテイルですかね。

本編でちょろっと触れましたが、別個にアラガミ解説のスペースって…あった方が良いですかね？

第六話　The cocoon of break warning（前書き）

英訳にてこずってます。「破戒」なんて出てこねぇよ…。後々が心配です。

第六話　The cocoon of break warning

一一一翌日。

キョウヤは朝食を適当に済ませ、エントランスに降りた。昨日とは違い、今日はツバキからの命令も特にない。やることは自分で探せ、ということだろうか。

キョウヤはとりあえず、誰かしらからアナグラでの生活について聞こうと思っていた。

すると、ちょうどよく、エントランスにはリンドウがいた。

「おう、来たか。」

「おはようございます。」

「少しはここの生活に慣れてきたか？」

「いえ…まだまだですね。今はとりあえず、次に何をしたらいいのか、手探りで模索してる状態でしょうかね。」

「ま、来てすぐはみんなそんなもんだな。」

リンドウが笑ってタバコを吹かす。

「やることがないなら…あー、そうだな。適当にミッションをこなしていけばいいんじゃないか？

それはさておき、今日は一発、お前との親睦を深めるために…」

「歓迎パーティでもしてくれるんですか？」
キョウヤはいたずらっぽく笑った。リンドウはタバコを灰皿に押し付け、苦笑いして頭を掻いた。
「と、言いたいところだが…。ま、例によってお仕事の話だ。」
「そうでしょうねー…。」
「今度の任務では、遠距離専門の神機使い、橘サクヤと同行してもらう。準備ができたら、ヒバリのところで、俺が発注したミッションを受けてくれ、いいな？」
「サクヤさん…？あ、もしかして、昨日ここで会った…？」
「ああ、そうだ。サクヤは俺の腐れ縁でなあ…まあ、気の良いやつだからあまり怖がらずに接してやってくれ、よろしく頼む。」
「わかりました。ところで、リンドウさんはこれからお仕事ですか？」
「まぁな。今日も新人の指導さ。セノっていう新型らしいが…。」
「ああ、俺の幼なじみです。優しい奴なんですが、優し過ぎてどうも…。足を引っ張るかもしれませんが、よろしくお願いします。」
「そういうタイプか…。たまーにいるんだよなぁ。この仕事は、志願して入るヤツばかりじゃないからな…。まぁ、一人歩きが心配なくなるまでは面倒を見てやるさ。」

「そうしてもらえると助かります。」

「じゃあ、頑張れよ。サクヤは先に現地入りしてるから、あんまり待たせてやらないように。」

「はい！」

リンドウと別れ、ヒバリから任務を受注し、出撃ゲートへと向かったキョウヤ。エレベーターの扉が開くと、昨日はアキオがいた場所に、リッカがいた。

「あ…。昨日はお疲れ様だったね。何か神機に違和感とか…あった？」

「いやぁ、まだろくに使いこなせてもないんで、あまりわからないな。」

キョウヤは神機のロックを外し、リッカに笑いかけた。

「まあ…そりゃそうかもね。でも、できる限り早く慣れておいた方がいいよ…。」

「ああ、そうするよ。」

キョウヤは、返事をしながら、手にした神機をガチャガチャ変形させてみた。

「…ふふっ。」

「ん？リッカ、どうかした？」

「いや…。言う割には、だいぶ使い慣れてるように見えてね。昨日入隊したばかりなのに、もうベテランみたいだ。」

「そうかな。」

キョウヤは神機を剣にして、肩に担いだ。

「じゃ、行ってくる。」

「うん、行ってらっしゃい。」

目的地は、『嘆きの平原』。平原とは言っても、実際は都市の一角のなれの果てである。何故か、巨大なクレーター状になっており、中心部では絶えず竜巻が発生、常に暗雲が立ち込め、日光の差さない大地には、コケや菌類がひしめき合う。

装甲ヘリでは、竜巻の影響で、あまり近づくことができない。キョウヤは、平原から少し離れた所に降ろされた。昔の鉄道跡が、今も残っている。駅らしき物もあるが、殆どアラガミに食われてしまっている。

竜巻が見える方へ、線路を歩いていると、線路が途切れており、そこに、銃を担いだ女性が立っていた。

「おはようございます。」

キョウヤが声をかけると、その女性が振り向いた。あのドレスには見覚えがある。

「この前の新人さんね？」

「澤吹キョウヤです。」

「キョウヤね。わたしの名前は橘サクヤ。よろしくね。ちょっと緊張してる？」

サクヤはキョウヤの肩をぽんと叩いた。

「ええ、そりゃもう、まだ戦闘は二回目ですし、それに…。」

こんな露出の多い女性と一緒。目のやり場に困る。

「ふふ、肩の力抜かないと、いざというとき体が動かないわよ。」

サクヤは優しく、キョウヤに言った。

その時、竜巻の方から、獣の鳴き声のようなものが聞こえた。サクヤの目が変わる。

「！！…早速、ブリーフィングを始めるわよ。」

「はい。」

「今回の任務はキミが前線で陽動、わたしが後方からバックアップします。遠距離型の神機使いとペアを組む場合、これが基本戦術だからよく覚えておいて。くれぐれも先行し過ぎないように。後方支援の射程範囲内で行動すること。ＯＫ？」

「ええと…うん、頑張ります！」

「…うん、素直でよろしい！頼りにしてるわ。」

サクヤとキョウヤは、戦場を見た。相変わらず、暗雲が不気味な雰囲気を醸し出している。

「さあ、始めるわよ。」

「はい、行きましょう。」

二人は線路から、平原へ飛び降りた。足元は、コケのおかげでマットのように柔らかい。

「目標を殲滅したら、速やかに戦域から離脱しましょう。」

「やっぱり…さっきの声は…。」

「ええ、考えたくないけど、恐らく近くに大型のアラガミがいるわね…。気付かれる前に、撤退しましょう。ほら、一匹目、いたわよ！」

サクヤが指す方を見るキョウヤ。そこには、地面から生えるように佇んでいる、一体のアラガミがいた。

「あれが、コクーンメイデン。動かないけどなかなか厄介よ。接近するなら、常に背後をとるように立ち回って！」

「了解！」

キョウヤは間合いを詰めるために、コクーンメイデンに近付いた。
コクーンメイデンはゆっくりこちらを向く。
このアラガミ、動けない代わりに聴力に優れており、かなり遠くからでもこちらを捉えてくる。

コクーンメイデンは、頭部からレーザーを撃ち出した。
それをジャンプで回避し、側面に周りこむキョウヤ。ブレードで斬りつけるが…。

「か、堅い…！」

オウガテイルの時のようには行かず、刃は表面を傷つけて止まった。
すぐに剣を離し、一旦間合いを取る。
サクヤは少し離れた場所から、レーザーを撃っている。

「それなら…！」

キョウヤは神機を銃に換装し、着弾時に爆発する弾を撃った。
効いている。コクーンメイデンは、ぐったりと倒れかかった。

「よし！」

キョウヤは神機で捕食しようと、剣を構えた。

「キョウヤ、後ろっ！！」

不意に、サクヤが叫ぶ。キョウヤは、とっさにステップを踏んだ。
左腕を、レーザーが掠めた。
振り返ると、もう一体のコクーンメイデンが、遠々距離から攻撃を仕掛けていたことがわかった。

「くそっ！」

キョウヤは、もう一体のコクーンメイデンの攻撃範囲外まで離れ、最初のコクーンメイデンに狙いを定め、ひたすら砲撃を浴びせた。
しばらくすると、コクーンメイデンは力無く倒れた。

「よし、次っ！」

キョウヤはコクーンメイデンのコアを捕食し、もう一体に狙いを変える。

「なかなかいい腕をしてるわね。でも、キミはもう弾切れじゃない？」

気付けば、キョウヤはオラクルを撃ち尽くしていた。またオラクルを手に入れるには、敵から神機を通して吸収しなければならない。

「それじゃあヒント。コクーンメイデンの外殻は堅いけど、内側はどうかな？」

サクヤがキョウヤにアドバイスをする。

「内側…ですか。」

自信は無かったが、狙う価値はある。キョウヤは、レーザーの間を縫いながら、コクーンメイデンに近付いた。
試しに、さっきのように斬ってみる。相変わらず、コクーンメイデンの殻は堅い。

「駄目かっ…。」

その時、コクーンメイデンは前面の甲殻を開いた。

俄かに嫌な予感がしたキョウヤは、シールドを展開する。

次の瞬間、コクーンメイデンは、甲殻の内側から棘状の骨を、爆発的なスピードで伸ばしてきた。
かなりの距離まで、押し戻されるキョウヤ。

「どうしたもんですかね…。」

「そうね、前にいたら、今の攻撃が危険だわ。なら、どうする?」

「後ろに周り込む?でも…。」

「正解。背後に回って、しばらく敵の様子を見ててごらん?」

キョウヤは言われた通り、コクーンメイデンの背後に回った。前面にいれば、確かに外殻を開いてくれるが、同時に攻撃が飛んでくる。
ならば、どうすればいいのか。

背後について、しばらくすると、コクーンメイデンが自身を押し上げ、内側が剥き出しになる状態になり、そこから、全方位に骨を伸ばした。

「そうか！」

コクーンメイデンが骨を伸ばすまで、タイムラグがあることを、キョウヤは見逃さなかった。タイミングはかなり難しいが、やるしかない。

再び、コクーンメイデンが上半身を持ち上げる。

すかさず、刀身を地面と水平にして、滑るようにコクーンメイデンを斬りつけるキョウヤ。

今度は、うまく剣撃が通った。

「よおし！このまま！」

二回、三回とコクーンメイデンを斬り続け、遂にコクーンメイデンは動かなくなった。

「やるじゃない、キョウヤ！」

「いえ、サクヤさんのアドバイスがあってこそでした…。」

キョウヤは肩で息をしながら、最後のコクーンメイデンを捕食する。

「これで、全部…ですかね。」

「そのようね。さあ、面倒事が起こる前に、早いとこお暇しましょ

うか。」

サクヤは、元来た道を戻り始めた。
キョウヤもそれを追いかけようとした。

「っ！！」

竜巻の中に、真っ赤な眼と漆黒の体躯を持つアラガミが、キョウヤを睨んでいた。そのアラガミは、そのまま踵を返し、竜巻の向こうへ去っていった。

「キョウヤ？どうしたの？」

「…サクヤさん、早く帰りましょう。悪い予感がします…。」

「え…？ええ…。」

二人はその場を足早に去った。

第六話　The cocoon of break warning（後書き）

今回も新キャラいませんね。
今更な説明なんですが、この小説、基本的にキョウヤメインの第三者視点で進行中です。ただ、たまーにセノメインになったり、他キャラメインになるかもしれません。

ご迷惑をおかけしますが、よろしくお願いします…。

第七話　The　iron　rain.（前書き）

ヤツが、来る。

第七話　The iron rain.

任務を終え、アナグラにてサクヤと別れたキョウヤは、いつものようにエントランスへ足を運んだ。入隊二日目にして、それが習慣になり始めていた。
受付では、セノとヒバリが楽しそうに会話をしていた。

「あ、キョウヤ！」

「よう、セノ。調子はどうだ？さっきはリンドウさんと初任務だったんだろ？」

「うーん…、いっぱい注意されちゃった…。神機の変形も遅れるし、捕食とかも躊躇いがあって隙が大きいって。」

「仕方ないですよ、セノさんは優しい方ですから。早めに慣れて下さいね。」

ヒバリは慰めるように、セノに笑いかけた。

「ところでキョウヤさん、新しいミッションが入ってますよ。」

「お、早速か。今回はどんな任務？」

「作戦名、『鉄の雨』。目標はオウガテイル二体とコクーンメイデン二体です。同行者はソーマさん、エリックさんと…」

「それと、わたし。」

セノがにっこり笑った。

「アナグラにきてから、初めて一緒の任務だね。」

「そうだな。お互い頑張ろうぜ。」

「うん！」

二人は拳と拳をぶつけた。これが、幼いころからの二人の、『健闘を祈る』サインである。二人は昔を懐かしみながら、くすくす笑った。

「お二人とも、神機のメンテナンスが終わるまで、待機しておいて下さい。」

ヒバリの指示に従い、二人は出撃ゲートで待機することになった。あの、神機のロックしてある場所だ。
現在、二人の神機は調整中のため、そこには無いが、調整が終了し次第、下階のメンテナンスルームから送られてくる仕組みである。

３０分程の後、キョウヤとセノのそれぞれの神機が送られてきた。

「さて、パイロットのオッサン達に挨拶して、出かけるか！」

二人はそれぞれの神機を、制御ケースに入れ、ヘリへ乗り込んだ。

鉄塔の森。旧日本海沿岸に位置する、旧世代の発電施設。
その一角で、立ち話をする男が二人。いや、実際話しているのは片方だけだ。もう一人の方は、彼の話を聞いてすらいないようにも見える。
話をしていた方の男が、接近するヘリに気付き、中から降りてきたキョウヤとセノに近付く。

「お、君たちが例の新人クンかい？」

「あ…、ああ、まだ話してなかったっけか？」

「は、はじめまして…。」

「噂は聞いてるよ。僕はエリック。エリック＝デア・フォーゲルヴァイデ。君もせいぜい僕を見習って、人類の為華麗に戦ってくれたまえよ。」

高慢な話し方が、少々癪に触るが、キョウヤもセノも、気にはしなかった。個性の強いアナグラのメンバーだ、こういう人もいるのだろう。頭は既に順応しているらしい。

そのとき、

「！エリック、上だ！」

離れた場所にいた、もう一人の男が叫んだ。

その声に驚いて、わけもわからないまま、セノは咄嗟に後ろに下がる。

それと同時に、パイプラインからオウガテイルが、エリック目掛けて飛びかかった。

「う…うわあっ！」

キョウヤが反応するヒマもなく、エリックがオウガテイルの下敷きになる。オウガテイルは、鋭い牙で、エリックの胸を引き裂いた。

飛び散る温かい鮮血が、キョウヤやセノの肌にかかる。

「ぃ…いやあああぁぁ！」

セノはパニックに陥った。その場にへたり込み、瞳孔を見開いてガタガタ震えている。

キョウヤは反射的に神機をフルスイングして、オウガテイルを突き飛ばした。

「ぼさっとするな！」

男は自らの神機を振り、オウガテイルを斬りつけ、キョウヤたちに注意を促した。しかし、セノはパニクって立つことすらできなかった。

「…チッ！お前！エリックは！」

「まだ息はある！致命傷だけど、助かるかも！」

「じゃあ手当てしろ！コイツは俺がやる！」

数分後、オウガテイルは倒れた。エリックに応急処置を施し、セノを落ち着かせると、ようやくキョウヤは一息ついた。

「…ようこそ、クソッタレな職場へ…。」

オウガテイルを倒した男は、疲れた様子もなく、静かに話しはじめた。

「俺はソーマ。…別に覚えなくてもいい。」

エリックとはうってかわり、排他的な口振り。視線は、先ほど倒したオウガテイルに向けたまま、キョウヤたちを見ようともしない。その態度に、さすがのキョウヤもカチンときたようだ。

「オウガテイルを倒してくれたことは感謝するけど、でも覚えなくていいってなんだよ。これから一緒に戦うってのに。…俺はキョウヤ。コイツはセノ。俺らの名は覚えてもらうぜ。」

ソーマは反抗するキョウヤが癪に触ったのだろう、舌打ちしてキョウヤを睨んだ。

「チッ…。言っとくが、ここではこんなことは日常茶飯事だ。」

ソーマはエリックの方をあごで示した。エリックは今は、出血は止まっているがまだ深刻な状態で、建物の影に隠れ、救援部隊を待っている。

ソーマはキョウヤに、自分の神機を突きつけた。

「お前たちはどんな覚悟を持って『ここ』に来た…？」

「どんな覚悟…だと？」

「なんてな…。時間だ、行くぞルーキー。」

突きつけた神機を肩に担いで踵を返すソーマ。最後に、まだへたり込んでいるセノを一瞥し、キョウヤに吐き捨てるように呟いた。

「…とにかく死にたくなければ、俺にはなるべく関わらないことだ…。」

そう言って、戦場へ行ってしまった。

「…なんだってんだよ…。…さ、セノ、立てるか？」

「うん…、大丈夫…。あの、わたしここにいる。」

「一人で大丈夫か？」

「わかんないけど、エリックを一人で置いて行くわけにはいかないでしょ？」

「そりゃそうだが…。マズくなったら呼べよ？」

「うん、そうする。」

セノは不安の残る笑みを浮かべて、キョウヤを送り出した。

「おい、女の方は…？」

「セノだ。覚えろって言っただろ。エリックを看てるよ。」

「ふん…。その甘さが命取りにならなきゃいいな…。」

「いちいち突っかかるなよ。悪いことじゃないだろう。」

「……。」

ソーマは黙ってしまった。どうやら、他人に干渉されるのが嫌いなようだ。

しばらく歩くと、小規模なアラガミの群れを見つけた。コクーンメイデンを拠点に、オウガテイルが徘徊している。

「いたぞ。せいぜい足を引っ張らないことだ。」

「はいはい、善処しますよ。」

ソーマとキョウヤは左右に別れ、素早い動きでアラガミを捉えた。キョウヤは、接近する動きに体重を乗せてオウガテイルに斬り掛かり、一匹を薙ぎ倒すと、コクーンメイデンのレーザーの間を縫いながら、もう一匹の尻尾を切断した。
バランスの取れなくなったオウガテイルは倒れ込み、そこに二回、三回と太刀を浴びせる。

オウガテイルとコクーンメイデンがキョウヤに気を取られている間に、ソーマがパイプラインの上に乗り、高い位置からコクーンメイデンを叩き潰し、剣の重みと遠心力でもう一匹のそばまで移動すると、そのまま剣を斬り上げて甲殻ごと両断、続けて水平に剣を振り抜き、追い討ちをかけてコクーンメイデンを沈黙させた。

ソーマがコクーンメイデンを捕食した頃、キョウヤは最後のオウガテイルを、至近距離からの拡散弾で撃破した。

「…思ったよりは使えるみたいだな…。」

「そりゃあどうも。」

キョウヤがオウガテイルを捕食しながら、苦笑いして答えた。
実際、キョウヤの戦闘能力はめざましい成長を遂げている。ソーマの活躍もあるが、今回の任務は、開始から五分もかからなかった。

「捕食が終わったんなら帰るぞ。」

「ああ、エリックの迎えも来るだろうしな。」

二人は帰路につこうとした。
そのとき、

甲高い叫び声が聞こえた。

「…！…ザイゴートだと！？」

「セノたちのいる方か！」

二人は全力でセノのもとへ向かった。その間にも、ザイゴートの甲高い声は繰り返し聞こえてきた。

たどり着いたとき、二人は驚愕した。
散らばっていたのは、凄まじい血痕と散らばった肉片。

「セノ！セノ！！生きてるか！！」

「うぅ……。」

細くて力ない声が、エリックを隠した建物の影の方から聞こえた。
キョウヤは声の方へ駆け寄った。

「…セノ…？」

エリックもセノも無事だった。

セノは真っ赤な返り血を全身に浴びてへたり込んでいた。手にしたスナイパーからは、未だに硝煙が立ち昇っている。

周りには、まだ原型を留めたままのザイゴートの死骸が、幾つも転がっていた。

「…おい…五匹はいるぞ…。」

ソーマですら、この惨状に驚きを禁じ得なかった。
鳴き声が聞こえて、二人がここへ到達する、たった二分足らずの間に、新兵のセノが、少なくとも五匹のザイゴートを葬ったのだ。

「これ…本当にセノがやったのか…？」

セノは、さっきパニックになったときと同じように瞳孔を見開き、ガタガタ震えながら、焦点の合わない目でじっと一点をみつめながら、消え入るような声で、

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい…」

と、呟き続けていた。

第七話　The　iron　rain.（後書き）

２日連続早朝更新ですね。セノちゃんが大変だ…。今回の新キャラはこちら。

エリック＝デア・フォーゲルヴァイデ（１７）

フォーゲルヴァイデ家の御曹司。入隊して日が浅いが、なかなかの戦闘力を持つ。高飛車だが、悪い奴じゃない。ソーマと結構仲が良いんじゃないか…？出オチなんかさせない。

ソーマ（１８）

第一部隊所属、古参のゴッドイーターの一人。他人を遠ざけるような言動をしている厨二病君だけどいじめないであげて。優しいコだから！なんか色々あるらしいけど、それはまた追い追い。

そういえば、エリックってどこの部隊に所属してるんだろう…。どなたか、知ってる方がいらっしゃったら教えて下さい。

第八話　Soldier's melancholy.（前書き）

連日投稿。テスト期間って凄いですね。勉強したくない一心でこんなことに。orz

第八話　Soldier's melancholy.

ソーマたちとの任務の後、アナグラへ戻ると、エリックは手術のために特別集中治療室へ、セノはメンタルケアのため、医務室へ担ぎ込まれた。
残されたキョウヤは、何もすることができず、ただ、医務室の前に立ち尽くすばかりだった。

「これが現実だ。」

廊下の壁に寄りかかっていたソーマが、キョウヤに言った。

「…頭じゃわかってるつもりだ…。」

「なら話は早え。とっとと馴れるんだな。」

キョウヤはソーマを睨んだ。淡々と語るソーマが、キョウヤは気に入らなかった。言葉に感情が無かったように聞こえた。

「お前だって、目の前で仲間がやられたんだぞ…。そんな言い方無いだろ…！」

「仲間…？…エリックの事か？俺には関係ない。」

「何だと！？」

キョウヤはソーマの胸ぐらを乱暴に掴んだ。そのとき見えた、フードの下のソーマの両目は、冷たく鋭く、キョウヤを見据えていた。

「弱い奴から死んでいく。ただそれだけの話だ。」

「…テメェっ！」

キョウヤは感情に任せ、腕を振り上げた。しかし、すぐに平静に戻し、ソーマを殴るのを止めた。ここでソーマを殴ったところで何も生まれない。それに、ソーマが間違ったことを言っているわけでもない。キョウヤは静かに、振り上げた手を下ろした。
ソーマは、胸ぐらを掴んでいるキョウヤの手を払いのけ、何も言わずに立ち去ってしまった。

「クソッ…。冷静になれ、キョウヤ…。」

キョウヤは自分に言い聞かせるように呟き、ベンチに腰かけ、セノやエリックが回復するのを待った。

どれほど経っただろうか、キョウヤがうなだれていると、医務室の扉が開き、若い女性の医師が出てきた。

「ん？キョウヤ？ずっと待ってたのか？」

「…あ、先生…。二人の容態はどうでしょうか…。」

「そうだな…、エリックの方はまあ問題ないだろう。うん、ただの重傷だ。五体満足だし、ゴッドイーターなら、全治二週間ってとこだな。意識は戻ってないが、すぐ目ぇ覚ますだろ。」

そこまで言うと、医師は火を付けずに煙草をくわえた。少し沈黙した後、カルテを眺めながら、言いづらそうに話し始めた。

「そんで、セノの方なんだが…。うん、まあショック状態で放心しちまったみたいだな…。…キョウヤ、ＰＴＳＤって知ってるか？」

「すんません、分からないです。」

「“Ｐｏｓｔ　Ｔｒａｕｍａｔｉｃ　Ｓｔｒｅｓｓ　Ｄｉｓｏｒｄｅｒ”の略で、日本語では心的外傷後ストレス障害ってんだ。戦争とか犯罪とか、そういうフツーじゃ体験しないようなひでぇ心的外傷を受けた後に発症する精神障害だ。あー…うん、鬱みたいなもんか。セノは多分、その類の精神障害だ。」

「それって…、長引くんですか…？」

「本当にＰＴＳＤだったらな。ＡＳＤって言って、ＰＴＳＤの短期回復版もあるから、それなら復帰できるだろうが…。もし回復しなきゃ、長いことメンタルケアが必要になるな…。…うん。」

「…そうですか…。ありがとうございます…。」

「ま、お前が会いに行ってやる事で、早期回復に繋がるかもだから。うん、ヒマができたら、顔を見せてやってくれ。」

医師は、キョウヤを元気付けるように肩を叩き、陽気に笑った。キョウヤも、ほんの少し安心さたのか、強張っていた体の力が、少しだけ抜けた。

「わかりました。…それじゃあ、セノとエリックのこと、よろしくお願いします。」

「ああ、任せときな。」

キョウヤは医師と別れ、エントランスへ向かった。

キョウヤの背中を見送ったあと、医師はカルテに目を通し、

「…本当に気懸かりなのは、ＰＴＳＤじゃないんだけどな…。」

と零した。

キョウヤがエントランスに着くと、コウタが、何をするでもなくベンチに座っていた。

「帰ってたのか。お疲れ。」

「よっ、お疲れ…。聞いたよ…同行してた人がアラガミにやられたって…。大丈夫だった…？」

「一命は取り留めたらしい。大丈夫だとは思うけど…。」

「セノちゃんは一緒じゃないの？同じ任務に就いてたんだろ？」

「…セノは、今医務室だ。血を見過ぎて鬱になっちまったみたいだ…。」

「…そう…。…うーん…、ここで二人して暗くなっても…、どうしようもないことだと思うんだよな…。」

コウタにしては珍しく、深く考え込んでいるようだ。コウタもセノが心配なんだろう。

「うん…大丈夫だよ、自信持とうぜ！根拠なしに決めてるから！無敵っしょ！」

しかし、やっぱり結論を出すことはできなかった辺り、コウタらしい。本人も何を言ってるのかわからないのではないか。キョウヤは笑った。

「ま、そういうことで…、元気だしてこうぜ！！」

「ああ、サンキュー。なんかお前見てたら、吹っ切れたよ。」

コウタは満足げに笑うと、エレベーターに向かった。しかし、ふと、思い出したように足を止め、振り返った。

「あ、そうだ…、リンドウさんが何か気にかけてたみたいだよ。さっき部屋に戻ってたから、行っといた方がいいよ！」

「リンドウさんが？ああ、わかった。」

コウタは、リンドウの部屋をキョウヤに教え、そのまま自室に戻っていった。
キョウヤはというと、すぐにリンドウの部屋へは向かわず、ベンチに座って、暫く天井を眺めた。

近い未来、実戦部隊に配属されるであろう自分がどうなるのか、どうすればいいのか。セノやエリック、他のフェンリルの面々とどう接していくべきか…など、いろいろと考えた。

そうして、暫くの後、キョウヤは重くなった腰を上げ、リンドウの部屋へ向かった。

リンドウの部屋がある、ベテラン区画。と言っても、見た目は殆ど新人区画とは変わらない。

（こんな形でここに来るとは思わなかったな。）

自分が他人に認められるゴッドイーターになるまで、ここに足を踏み入れることは無いだろうと、なんとなく考えていたキョウヤ。もちろん、自分からここに来ようと思ったことも無かったが、先輩を待たせていては、そうも言ってはいられないだろう。
ベテラン区画の、一番奥の角部屋が、コウタに教わった、リンドウの部屋だ。キョウヤはその扉をノックした。

「…誰だー？」

「キョウヤです。なんか、ご心配をおかけしてるって聞いたので…。」

「おお、キョウヤか。まあ、入れ。」

キョウヤはその扉を開けた。そう言えば、他人の部屋に入るのはこれが初めてだ。

「失礼します…。」

リンドウの部屋は、閑静な雰囲気に包まれていた。それは、窓の壁紙ディスプレイが、夕暮れの海を映し出していることに起因することが大きいが、他にも、高そうなコンポや酒のビンが、規則正しく並べられているのもその一因だろう。

「…お心遣いありがとうございます。俺は…大丈夫です…。」

「ん…仲間が目の前でやられるのは初めて…か。」

「ええ、まあ…。でも、心のダメージは、セノのほうがでかかったみたいです…。」

「そうか…。セノは繊細そうだったし…。いつかこうなるとは思ってハラハラしてたが…。…そういや、お前とゆっくり話したことは無かったな。あー…、さっきの任務はどうだった？」

「ええ、任務の遂行状況は悪く無かったです。むしろ良いくらいで

すが…、エリックが…。」

「そうだな…。じゃ、あまりあいつとも話してないだろ。…エリックはいわゆるボンボンでなあ…。甘ったれたところもあるが、妹思いの良い奴だよ。」

「妹がいるんですね。そう思うと、心底彼が死ななくて良かったと思います。」

「神機使いになると、多かれ少なかれその重責と戦わなきゃいけない…。あいつはあいつなりに、精一杯踏ん張ってるな…。でもま、アラガミに襲われて生きてるんだ。九死に一生、てとこだな。悪運の強いやつだよ。普通なら、死ぬやつの方が多いからな。」

「そうですね。喜んでいいのかな。あ…、あと、もう一人、同行したソーマについてなんですけど…。」

「ああ、ソーマか。やっぱりお前も相手し辛いか？」

「…はい、少し…。」

「ソーマはこの極東支部でも、トップクラスの神機使いだ。厳しい言動でよく誤解されがちなんだが…、んー…、まあガキなのは間違いないな！ただ俺は、あいつほど優しいヤツもなかなかいないと思ってる。」

「優しい？あいつが？」

「あいつは目の前で仲間が死ぬことを、一番恐れている。だからずっと…仲間を遠ざけている。」

「……。」

「ん！というわけで、お前があいつの仲間になって、ずっと死なないことを命令しとくとするかな！だから、まあ…あいつをあんまり責めてやるな。いいな？」

「…わかりました。仲良くなれるように頑張ります。」

「そうしてやってくれ。あー、あとコウタ。あいつに言伝を頼んだんだが、お前良い友達を持ったな。」

「コウタか…。確かにいいやつですよ。バカですけどね。」

「ははっ！このご時世に、よくもまああんなにまっすぐ育ったもんだ。親御さんの教育の賜物なのかね…。気の合う仲間は、本当にかけがえのない宝だ。大事にしろよ？」

「ええ、そうします。」

「そうだな…コウタもお前も、技術はまだまだ未熟だが、まあ、しばらく生き延びてりゃいい線いきそうだ。期待してるから、とにかく死ぬなよ。いいな？」

「了解、ありがとうございます。リンドウさんも、気を付けて。」

「お？言うじゃないか。お前に心配されるようなヘマはしないつもりだよ。」

二人はお互いに笑いあって、別れた。

リンドウやコウタに励まされたキョウヤは元気を取り戻し、また、エントランスへ向かった。

セノの分まで、自分が頑張ってやろうと、そう思った。

第八話　Soldier's melancholy.（後書き）

新オリキャラ登場。

医師（２５）
アナグラの専属担当医。カウンセラーでもある。鋭い目つきや煙草を吸う姿、乱暴な言葉遣いから、怖い印象を与えがちだが、ちょっとしたところで可愛い一面が見受けられる。本名は遠藤フウコ。

そういえば、ゲンさん出てきてないですね。どうやって出したものか…。

第九話　The captain solid.（前書き）

今回はタイトルが上手に訳せて満足です。え？パッと見全然わからない？「金剛の巨魁」ですよ。

第九話　The captain solid.

あの日から、二日経った。未だに、セノもエリックも復帰できていないが、その分、キョウヤが積極的に任務を受け、着々とクリアしていた。その戦績は、ここ数年の新兵の最高連続任務完遂記録を優に上回るほどで、コウタもキョウヤに負けないくらいに、任務に出たが、それでもキョウヤには及ばなかった（コウタの場合、完遂できずに引き返してくることも何度かあった）。

そして、任務や講義の合間を縫って、時にはコウタを連れて、キョウヤはセノの様子を見にいっていた。もう既に、セノは人と普通に会話できるようになってはいたが、未だ不安要素が残るため、ドクタースストップがかかっているらしい。

今日も、キョウヤが任務から帰る。今回の任務は、オウガテイル二体とザイゴート一体の討伐、同行人は、シュンとカレルだ。

「…あれは間違い無く俺がトドメだっただろ！？」

「いーや、俺だね。第一、お前が斬ってたの足じゃねえか。俺のレーザーは確実に頭捉えてたよ。」

「相手はアラガミだっ！斬る場所がどこだろうと倒れてコア摘出したら勝ちなんだよ！」

いがみ合うシュンとカレル。こんな光景も見慣れたものだ。キョウヤは苦笑いしながら、ヒバリにミッションの成功を報告する。

「あいつら本当仲良いよなぁ…。」

「そうですか？まぁ、ケンカするほど仲が良いとは言いますが…。結局、誰が一番多く倒したんですか？」

「あー、それ俺だ。あの二人が足を引っ張りあってるうちに、残りのオウガテイルとザイゴート倒しちまった。」

「じゃああの二人は、どちらにしろ負けの手柄を取り合ってるんですね…。」

ヒバリと一緒に、呑気にシュンとカレルのケンカを眺めるキョウヤ。そこへ、ツバキがやってきた。

「あ、ツバキさん。今任務を終えたところですよ。」

「うむ。なかなか健闘しているらしいな。…あの二人は？」

「ええ、不毛な戦いの真っ最中です。」

「…まあいい。キョウヤ、活躍は耳にしている。そこで、昇進任務の予定を早めて、本日行うことにする。」

キョウヤとヒバリは目を丸くした。本来なら、入隊して一週間後に行われる昇進任務の予定が早まるのは、異例である。

「ツバキさん、良いんですか？まだ三日もありますよ？」

「支部長の推薦だ。私も一応、意見してみたのだが、キョウヤとコウタの戦績には目を見張るものがある。任務を受けるには充分な技

量があると。そういうことらしい。この任務が終わったら、晴れてお前も、本隊に所属することになる。」

普通なら喜んでいいのだろうが、キョウヤは戸惑っていた。まだ、セノのことが気がかりなのだ。

「セノがまだ回復してないんですよね…。もし俺たちが先に昇進したら、セノは一人で、その任務を受けるんですか？」

「案ずるな。昇進任務は二人以上で行うことが義務付けられている。セノは回復を待って、普段通りの訓練期間の終了後、この任務を受けることになる。」

「そうですか…。わかりました。任務を受注します。」

「よし。同行者は藤木コウタ。目標は寺院に出現したコンゴウ一体の討伐とコアの摘出だ。一四三〇までに、準備を整え、現地へ向かうこと。」

「了解。」

ツバキはヒバリにミッションの依頼をすると、そのまま行ってしまった。

キョウヤは、まだ困惑した表情で、ヒバリから任務を受注する。

「セノさんなら大丈夫ですよ、きっと。新兵二人でこの任務をするより、一人インストラクターがついた方が、楽ですからね。」

ヒバリはキョウヤを励ますように言った。

「だから、コウタさんと二人だけだと大変ですよ。頑張ってくださいね。」

「ああ、ありがとう。いつまでも考えてちゃ始まらないな。」

そう答えて、キョウヤは任務の準備に向かった。
ターミナルでノルンを開き、コンゴウの項目を開いて眺める。

情報によると、コンゴウは猿型のアラガミであり、空気圧を利用した攻撃を行うらしい。今までの小型アラガミとは違い、単体の力が強い中型のアラガミだ。
一撃一撃が重いため、ガードを固めなければならない…そんなことを考えつつ、持って行く道具を整理したりしながら、コウタを待った。

（…おいおい、まだかよ、間に合うか？）

１４：２０。コウタはまだ来ない。キョウヤがメールしてみたが、返事も返ってこない。寝てるのだろうか。ヒバリにも一応聞いて、直前にミッションに出てないことも確認済みなのに、まだ来ない。

（くそー…ツバキさんに睨まれんのはお前だけじゃないんだぞー…！）

イライラしながら、ターミナルの画面をコツコツと指で叩くキョウヤ。
その時、やっと待ち人の声がした。

「おお？今回はアンタと一緒か？」

「お前！遅えよ！遅刻するかと思ったよ！」

「ゴメンゴメン、いやー、バガラリーが盛り上がっちゃってさぁ。」

「お前それターミナルで観てんだろ！着信気付け！」

「だってさぁ、集中してたら気付けるもんも気付けなくね？？
でも、お互い無事で何よりだね！命あってのこの商売だからねぇ。」

「本当だよ。ツバキさんに殺されるかと思ったよ。」

「ははは、オレも何かあると、母さんも妹も路頭に迷っちゃうから
気を付けないとなー。」

コウタが珍しく深刻そうな顔をした。キョウヤは正直驚いた。コウタに、こんな明確な目的があったとは思いもしなかった。

「あ、そうだ、サクヤさんって知ってる…よね？もしかして仲良い？」

「な、なんだよ、いきなり…。うーん…、俺もまだ二回しか一緒に任務受けてないしなぁ…。」

「この前食堂で仲良さそうに話してたろ？」

「ああ…、あれは神機の使い方とか聞いてたんだよ。サクヤさんだけじゃなくて、リンドウさんにもタツミさんにも聞くし。」

「ふーん。あの人ってなんかいいよね。美人だし、感じもいいし、強いしさ。戦うお姉さんって感じでさ、たまんないよなー！？」

「ちょ…？コウタ？そういう話、もっと別の時にしねぇ？」

「よおおし！なんか、テンション上がってきたああ！今回の任務、どっちが多く倒すか勝負しようぜ！」

「はあ？何シュンみたいなこと言ってんだよ。それに今回は目標は一匹だろ？」

「じゃあどっちがそいつにトドメを刺すかだ！サクヤさんにいいとこ見せてやるぜー！」

キョウヤは呆れて笑い声を漏らした。

「まあいいか。じゃあなんか賭けようぜ？そうだな…今度の配給のプリン味レーションでどうだ？」

「よっし、言ったな！じゃあぜってー負けねーから、頑張ろうぜ！」

（今日も、セノに良い土産話ができそうだ。）

―――戦場は、鎮魂の寺院。今となっては忘却の彼方、贖罪の街の教会と並ぶ、人々が神に縋って生きていた頃の忘れ形見。荒ぶる神は、人の救いであった神仏さえも、無慈悲に喰らう。―――

雪がしんしんと降り積もるこの場所に、二人は降り立った。

「さーて、一丁やりますか！」

張り切るコウタ。自分の神機を抱え、一心不乱にコンゴウを探す。

「おいおい、そんなに離れるなよ。つか、お前ガンナーだろ、後衛につけよ。」

キョウヤが注意を促すも、コウタはどんどん先へ行ってしまう。

（足音…。中型にしちゃ軽い音だが…。どこだ？）

キョウヤは五感をフル稼働させ、敵の位置を探る。

急に、キョウヤは走り出し、前のコウタを蹴り飛ばした。

「前ばっか見てんな！」

今までコウタのいた場所に、オウガテイルが降ってきた。

「おわあぁっ！あっぶねー！」

「もっと集中しろ！一匹じゃないぞ！」

キョウヤが思い切りオウガテイルを斬りつけ、それを踏み台にして、神機を変形させながら、高くジャンプする。

足元のオウガテイルを撃ち続けるコウタの背後に向かって、弾速の速い弾を数発撃ち出すと、そこにいたもう一匹のオウガテイルがのけぞった。

「こいつは任せろ！」

背後のオウガテイルに気付いたコウタを横目に、一気に間合いを詰めてオウガテイルに近づき、ブレードで斬りつけるキョウヤ。トドメに、インパルスエッジを二発撃ち込み、オウガテイルを倒した。

コウタも、最初のオウガテイルに五発の弾丸を放ち、ほぼ同時に倒していた。

「ったく、集中力が足りない！」

「上からなんて気付けないよ！よく気付いたなー、キョウヤ！」

「足音がするんだ。意識して聞いたら解るって。」

そう言われたコウタは、耳をそばだてて必死に足音を聞き取ろうとしている。キョウヤはオウガテイルのコアを捕食し、コウタを連れて、寺院の境内の方へ向かった。

「なぁ、足音なんて全然…」

「シッ…。足音はしないが、何かを噛む音がする…。それに、血の匂い…アラガミの血だな、オウガテイルでも喰ってるのか…。」

「お前、よくそんなことまでわかるなー。…てか、いるのかよ！」

二人は石垣から、そっと寺院の中を覗いた。
パイプ状の器官を持った大きな背中が見える。コンゴウだ。
キョウヤの言うとおり、確かにオウガテイルを捕食している。

「準備はいいな？」

「合点！」

「行くぞ！！」

二人は同時に飛び出し、ありったけの銃弾をコンゴウに浴びせた。
銃弾を浴びながらもこちらを振り返り、大きく吼えるコンゴウ。

「き、効いてない！？」

「いや、効いてるはずだ！リロードできるまで、お前はサポートだ！」

「りょ、了解！」

キョウヤは素早く剣形態に神機を切り替え、コンゴウにきりかかる。
しかし、コンゴウの表皮は予想以上に堅く、その腕に刃は弾かれた。

「ちっ、浅い…！」

コンゴウが振り回す腕を回避しながら、キョウヤはところどころに剣撃を加え、肉質を確かめた。

「尻尾は割と効いてるかなっ！」

比較的、肉質の柔らかいところを見つけては、そこを狙って斬りつけるキョウヤ。暫くして、再びコウタも銃弾を打ち始めた。

と、急にコンゴウが四つ足で構えた。次の瞬間、背中のパイプから、破裂音と共に衝撃波が生まれた。間合いを詰めて戦っていたキョウヤは、避けきれずに壁に叩きつけられた。

「ぐうぅっ…！」

「キョウヤ！！」

コウタがすかさず、スタングレネードを投げると、それが炸裂し、眩い閃光が走り、コンゴウの視界を奪う。その間に、キョウヤは鎮痛剤を飲んだ。

「くそ、攻撃もらわないようにしないと、薬中になっちまう！」

キョウヤは再び神機を銃形態にし、間合いをとって銃弾を撃つ。コンゴウが、衝撃波を前方に向けて撃ち出すが、キョウヤとコウタはステップで回避する。

―――パイプ状の器官が壊れた。

「いけるよ！」

キョウヤは剣で、壊れたパイプ部分を斬りつけた。パイプの下は、剣撃が入りやすかった。
コンゴウは鬱陶しそうに、キョウヤに殴りかかるが、それをシールドで受け流し、背後に回ってまた斬りつける。
コンゴウがコウタの方に向かって構えた。しかし、今度は周囲にも前方にも衝撃波を飛ばさない。
その代わり、コウタの足元で空気が渦を巻き、コウタの足を掬った。
「…うわ！」
倒れたコウタが顔を上げると、コンゴウが腕を振りかぶっていた。
「わあああ！！」
「コウタ！！」
コウタは半狂乱で銃弾を打ち続けた。
ーーーぐらり、とその巨体がよろめき、コンゴウは腕を振り下ろさないまま、その場に倒れ伏した。
「や…やった…？」
「…まったく、驚かしやがって…。」
コウタは未だに自分が留めを刺したことが信じられず、キョウヤは

安堵のため息を漏らした。

第九話　The captain solid.（後書き）

さて、絶好調の連日投稿も今日で最後かもです。テスト期間が終わりまして、所属しているサークルが修羅場を迎えます。

サークル活動の合間を縫って、ちまちま更新するつもりです。どうか今後もよろしくお願いします。

第十話　Ａｒｋｏｌｏｇｙ．（前書き）

長らくお待たせいたしました。第十話です。会話回です。

第十話　Ａｒｋｏｌｏｇｙ.

「レーション！」

「え？」

コンゴウを倒し、アナグラへ帰るヘリの中で、コウタが思い出した様に切り出した。

「賭けたろ！そんで賭けはオレが勝ったからな！」

「…あっ！」

キョウヤも、自分が言ったことを、今思い出したようだ。

「ちくしょー、こういうことばっかしぶとく覚えてやがる…。」

「はっはっは、何とでも言うがいいさ！賭けを持ちかけて来たのはキョウヤだからな！」

キョウヤが皮肉ってる横で、コウタは満面の笑みを見せる。

「ああ、はいはい。帰ったらな。」

「新型ァ、何賭けてたんだ？」

話を聞いていたパイロットがキョウヤに尋ねる。

「あー、レーションですよ。今度の配給の、プリン味のヤツです。

俺ら、まだ食ったことないんですよね。」

「ハハハ、良いもん賭けたなぁ！新型、良いこと教えてやるよ。アレ、すげーマズいぞ！！」

「げッ！マジかよ！！」

そんな会話をしているうちに、ヘリはアナグラに到着した。
ヘリから降りたキョウヤとコウタを待っていたのは、ツバキとアキオだった。

「よっ！坊主共、お疲れさん！」

「二人共ご苦労だった。目標は達成できたか？」

「ええ、この通り、なんとか。」

キョウヤは、自分の神機のコアをツバキに見せた。敵コアの捕食に成功した証明の明かりが、ぼんやりと点滅する。

「…よろしい。現時点を持って、澤吹キョウヤ、及び藤木コウタを、訓練兵から二等兵へ昇格とする。」

コウタが歓声をあげる。

「よっしゃー！やったな、キョウヤ！」

「ああ、そうだな…。」

「二人は討伐部隊である第一部隊へ配属となる。今後も精進するよ

うに！」

「ハイ！」

それだけ伝えると、ツバキはエレベーターの方へ戻っていった。それを確認したアキオが、キョウヤを呼ぶ。

「お前さんに昇進祝いの朗報だ。新型神機の強化技術が、やっと追いついたらしい。」

アキオは、一枚の紙を取り出してキョウヤに見せた。神機の設計図のようだが…。

「これは？」

「お前さんのその神機の、強化予定図の写しだ！お前さんの戦闘データを元に設計されてるから、今のよりずっと使いやすくなるはずだ。まだ開発段階だから、もう少し変更があるかもしれんがな。」

シンプルな造りだが大経口の銃身に、細身の太刀のような刀身。そして、滑らかな曲線を描く、無駄のないフォルムの装甲。
確かに、攻撃を受け流しながら、流れるように戦うキョウヤの戦闘スタイルにぴったりの兵装だ。

「これが、俺の神機…。」

「因みに、セノの方の神機も考案中らしいが、あいつのは戦闘データが足りないそうでな。まあ、復帰してからのお楽しみってところだな！」

アキオが陽気に笑う。それを指をくわえて見ていたコウタが口を挟んだ。

「キョウヤばっかずりぃぞ！アキオさん、オレの神機も強化してよ！」

「バカいえ、お前のモルスィブロウは、元々現役の頃のツバキが使ってたモンだ。既に限界までチューンナップされてる。お前の神機の方が、キョウヤのよりずっと強力なんだぞ。」

「そうなの！？」

「へえ、ツバキさんの…。」

「それじゃあ、オレはあんなに苦戦しないはずだろ！」

「バーカ！そりゃあお前が使いこなせてないだけだ！」

アキオとコウタが言い合っているのをよそに、キョウヤはもらった設計図を、長いこと見つめていた。

―――数分後、サカキ博士の研究室。

「…セノ！」

いつものように、午後の講義を受けるため、研究室を訪れたキョウヤとコウタ。そこには、医務室で寝ているはずの、セノの姿があった。

「あ、キョウヤ、コウタ。お疲れさま。」

「ダメだろ、抜け出してきちゃ！」

「違う違う、講義は受けていいって、先生が言ってくれたの。まだ神機は握れないけど、ちょっとずつ慣らしていくんだって。」

「そ、そうか。それならいいんだ。」

少し取り乱したキョウヤが、平静を取り戻しながら答えた。

「聞いたよ。正規兵に昇進したんだってね。おめでと！」

屈託のない笑顔のセノ。

「セノちゃんも、すぐ訓練兵卒業できるって！応援してるからさ！早くよくなってね！」

「うん、ありがとう、コウタ。」

会話を楽しんでいるうちに、サカキが奥の部屋から、スクリーンを持って出てきた。

「やぁやぁみんな、待たせたね。おっ？セノ君、もう出てきて大丈夫なのかい？」

「ええ、講義だけですけど。」

「それは良かった。いつも二人相手だけってのは少し寂しくてね。二人と言っても、コウタ君はいつも寝ているから、実質キョウヤ君とマンツーマンだし。」

サカキがコウタの方を見てニヤリと笑う。

「げっ…。博士、何も言わないから気付いてないのかと思った…。」

「二人しかいないのにバレないわけねえだろ…。」

「アーコロジーという言葉を知っているかい？」

コンピューターにスクリーンを接続しながら、サカキが問いかける。ふと見ると、早くもコウタは夢の世界へ旅立ちそうになっている。

「アーコロジーとは、『それ単体で生産、消費活動が自己完結している建物』を指す言葉でね。そう、実はアナグラを中心としたフェンリル支部は一種のアーコロジーだといえるんだ。」

スクリーンに映し出されたのは、よく見慣れた、アナグラ極東支部と、その周辺の外部居住区を写した写真だ。

「これって、極端な話、ある支部を除いた全てのフェンリル組織が滅んでも、残った支部は単独で生産、消費活動を行い、今まで通り生き残ることが可能ってことなんだよ。」

「そんな日はこないで欲しいものだな…。」

キョウヤがぼそりと呟いた。

「アナグラは地下に向かって食料や神機、各種物資の生産を行うプラントがあり、外周部には対アラガミ装甲壁や、キミたち優秀な神機使いをはじめとした、強固な防衛能力もある。それがフェンリルの支部であり、人類を守るために最適化されたアーコロジーなんだよ。

…ただ、そこにも問題はあって、それは収納可能な人口に限りがあることなんだ。」

サカキはスライドを映し変えた。『近年の極東支部における人口の増加とアナグラの拡大面積』と表記されたものを始め、数種類のグラフが映し出された。

「君たちも知っている通り、この極東支部の周囲には広大な外部居住区が形成されている。しかし、彼ら全てを収容するだけの規模は、まだこの支部にもない。外周部に対アラガミ装甲壁を巡らすことが、今できる最大限の対処策なんだ。」

今まで船を漕いでいたと思っていたコウタが、人口密度の話の辺りから目を覚ました。

「…それだけで足りるのかな。現に装甲は頻繁に突破されてるんじゃ…。」

何か思うところがあるのか、不満そうにコウタが呟く。

「だからそのためにゴッドイーターの防衛班も配備されている…」

そこまで言ったサカキは、はっとして言葉を切った。

「…思慮に欠けていた。すまない、コウタ君のご家族は外部居住区にいるんだったね。軽率な物言いを許してくれ。」

「いえ、オレはただ…」

謝るサカキを見て、バツが悪くなったコウタが、慌てて言葉を濁す。

「本当はアナグラを地下に向けて拡大して内部居住区を増やす計画もあったんだけどね…。」

「でも、その計画をより安全で完璧にしたのが、『エイジス計画』なんだよね！」

場の雰囲気をもとに戻そうと、コウタが元気よく尋ねた。

「そうだね。現状、極東支部の地下プラントの多くの資源リソースはエイジス建設に割り当てられているんだ。…その話はまた今度にしようか。」

第十話　Ａｒｋｏｌｏｇｙ．（後書き）

そういえば前回カレルの紹介を忘れてたので、ここにご紹介しておきましょう。
…ごめんよカレル…

カレル・シュナイダー（１７）

第三部隊所属のゴッドイーター。点数を稼ぐため、敵を深追いし過ぎる傾向にある。シュンと仲が良い。…仲が…良い…？

第十一話　Ｃｏｗｂｏｙ.（前書き）

長らくお待たせいたしました。

冬合宿中にも関わらず風邪をひいてしまってやることのない赤牛が、ＧＥＬ　ａｒｃ第十一話をお送りします。

第十一話　Cowboy.

またか、ここはどこだ———

君を助けたいけど、今は何も見えないんだ———

どこにいるんだ———

敵も、君も、神機も、俺も———

目が慣れないんだ。音も聞こえない。鼻も利かない。気配も感じない———

どこだ…――

君は…、どこだ…――

君は……、……誰だ……？――

「キョウヤ、入るぜー？」

うなされるキョウヤのもとへ、コウタがやってきた。手には任務の半券を持っている。

「…ん…、コウタか…。早いな…。」

「何が早いだ、何時ものオレでももう起きてる時間だよ！」

時計を見れば、既に１０：３０。キョウヤは飛び起きた。いつもより、二時間も寝坊してしまった。

「今日は第二部隊と哨戒任務が入ってたろ？早くしなよー。」

コウタが冷やかす。そんなことを構うヒマもなく、キョウヤは身仕度をする。

「あと何分で任務っ！？」

「あと１０分。早くぅ～！」

「よっし、完了！行こう！」

一番苦戦した右腕を上着の袖に通し、身仕度を終えたキョウヤは、コウタと共にエントランスへ向かった。

エントランスでは、既に第二部隊の三人がキョウヤ待ちしていた。
「お、来たな！寝坊か、キョウヤ？」
「遅れてすんません！」
「いや、時間にゃ間に合ってるから気にすんな！」
笑ってキョウヤ肩を叩くのは、防衛班の班長である、大森タツミ。
頼れるリーダーである。
隣のソファでは、カノンがにっこり笑って手を振っていた。
「間に合ったはいいが、ちょいと仕事はキツくなりそうだぞ。」
カウンターでヒバリと任務の確認をしていたブレンダンが、苦笑しながら言った。
「どうかしましたか？」
「平原地区でオウガテイルの群れが目撃されたらしい。哨戒ルートからは外れるが、遠くはない。」
「他の部隊も哨戒任務に出払ってますし、他に人員が割けません。お願いします。」
ヒバリがブレンダンに付け加えた。すると間髪いれず、
「オーケーオーケー、ヒバリちゃんの頼みじゃ断れねーな。」

と、タツミが独断で承認してしまった。

「ちょ、ちょっと！聞いてないし！」

コウタがボヤく。しかし、反対しているのはコウタだけ。

「仕方ないですよ。これがタツミさんクオリティですから。」

カノンが諭すようにコウタに言った。的を得ている、とブレンダンもヒバリも納得する。

「カノン、それはちょっと俺に失礼じゃないかい？」

「そうですか？誤解ですよ♪」

いたずらっぽくカノンが笑った。

「…まあいいや。お前ら、そろそろ出撃だ。状況が悪くならない内に終わらせるぞ！」

軍用車両で、第８ハイブの装甲壁を、外側から観察し、損傷があればその地点をチェックして、ビーコンを発する小さなチップを残していく。はぐれアラガミがいれば、それを駆除する。この単純な作業を繰り返すのが哨戒任務だ。単純過ぎて、コウタは退屈してきたのか、欠伸をしている。

「あ、あそこ。Ｃ３５地区付近の外壁に穴ボコ開いてますね。ついでに侵攻中のザイゴートが一匹です。」

車上から双眼鏡を覗くカノンが運転手のタツミに近付くように指示する。

「なぁんだ、一匹かあ。張り合いねえなー。」

「俺らの仕事が少ないってのは、平和な証拠だ。いつも通り、コウタが狙撃、キョウヤがコアの回収。俺がチップを貼ってくる。タツミはそのまま走り続けてくれ。」

「ういーす。」

タツミは車両を外壁の方へ向けた。コウタがモルスィブロウを構え、放たれた銃弾はザイゴートを貫いた。一旦外壁前で旋回し、その隙にブレンダンが飛び降り、外壁にチップを貼り付ける。キョウヤは車上から捕食形態の神機を構え、倒したザイゴートを喰らう。チップを貼ったブレンダンは近付く車両に飛び乗った。
ここまで、車両は一度も停まらなかった。コウタもキョウヤも、哨戒任務はお手の物になっている。

「うーん…。最近、外壁の損傷がヒドくなってきてますね。」

カノンがデジタルボードにチェックを入れながら呟いた。
「今までどれくらいチェックしたっけ？」
タツミが運転しながらカノンに問いかける。
「突破は０、深刻が２、やや深刻が５、軽微は１９箇所ですね。」
「…ブレ、お前いくつ喰った？」
「俺はまだ一つだ。」
「…キョウヤは？」
「えっと…、三つですね。」
「……個体個体の侵攻スピードが上がってきてるかもな…。」
タツミはそう呟いて、車を走らせ続けた。

そして、あの竜巻が渦を巻く平原付近に車を停めた。
「…問題の平原に着いたぞ。」
全員が車を降り、崖下に広がる平原を見た。
確認できるだけで、オウガテイルが三匹。群れというのだから、まだどこかにいるのだろう。

「んじゃあ、ブレが留守番。カノンと新人二人は俺についてこい。」

「了解。」

「わかりましたぁ！」

「えー？みんなで行けばいーじゃんよ？」

崖下に飛び降りるタツミやキョウヤの背中に、コウタが問い掛けた。自分の神機をケースから取り出しながら、カノンが答える。

「そんなことしたら、歩いてアナグラに帰ることになりますよ？アラガミは何でも食べちゃうんですから。」

「…あ、そっか。それは面倒だなあ。」

「リンドウさんたちみたいに、時間をかけずに戻って来れれば話は変わってきますけどね。」

神機を持ち、ブレンダンに手を振って、カノンも飛び降りる。それに続いて、面倒くさそうにコウタも飛び降りた。

飛び降りた地点にいたオウガテイルを軽くあしらって、一行は二手に別れ、平原を一周することにした。
キョウヤはカノンと共に、オウガテイルを探す。

「そういえば新型さんと共闘するのは初めてです！」

「そうだな、よろしく頼むよ。…ところで…、さっきオウガテイル倒した時にさ…。聞き間違いだったら悪いんだけど…。」

「何ですか？」

「…『さっさとくたばっちまいな！』とか、『蜂の巣にしてやるよ！』とか聞こえたのは俺の気のせいかな…。」

「えっ？私、そんなこと言いました？」

「…じゃあ俺の気のせいってことにしよう。コウタが叫んだんだろうな。…多分。」

カノンの屈託のない笑顔が、キョウヤはどうにも腑に落ちなかった。…が、ここは雑念を交えない方が良いだろう。無理やり自分を納得させた。

「あっ、ほらいましたよ！オウガテイル！」

カノンが指を指す方向を見ると、オウガテイルがのしのしと歩いているのが確認できた。

「行きましょう、キョウヤさん！」

「了解、援護頼む！」

キョウヤがブレードを構え、オウガテイルに斬り込む。尻尾、脚、

頭部を斬り、剣の峰で薙ぎ倒す。そこに、カノンが火炎放射系の弾を撃った。

「ははははっ！消し炭になりなさい！」

やっぱり気のせいではなかった。カノンは戦闘中に性格が崩壊するようだ。

カノンのバレットが効いたのか、オウガテイルはよろめきながら立ち上がり、逃げ出した。それにキョウヤよりも早くカノンが反応し、大きくジャンプしてオウガテイルの正面に周り込む。驚いたオウガテイルが足を止め、カノンは放射弾を更に撃つ。

キョウヤが呆気に取られている間に、カノンがオウガテイルを倒してしまった。

「はい、終わりましたよ！」

「…もう一度だけ聞こう、さっき聞こえたのは俺の気のせいなのか？」

「ええ、気のせいでしょう♪」

「……。」

笑って即答のカノンは戦闘中の性格を理解しているのか。少しカノンが信じられなくなったキョウヤだったが、剣を捕食形態にして、倒したオウガテイルを捕食しようとした。

その刹那。

「キョウヤさん危ないっ！」
カノンが叫ぶと同時に、半ば反射でシールドを展開するキョウヤ。
その装甲越しに、今まで感じた事のない重い一撃を受けた。
「うぐっ…！？」
油断していて、神経を研ぎ澄ませていなかったためか、相手の呼吸音、足音を感知できなかった。しかし、今装甲の向こうで発せられている呼吸音は、明らかにオウガテイルのものでは無い。
キョウヤを押し潰そうとする相手に、カノンが爆発弾を撃ち込み、それを退かせた。
キョウヤが装甲を戻す。
目の前に現れたのは、オウガテイルよりはるかに巨大な体躯の、獣のようなアラガミだった。
「…ヴァジュラ…。私たち二人じゃ少しキツい相手ですね…。」
「あれが、ヴァジュラ…！」
キョウヤも噂には聞いていた。新人の戦死率が一番高いアラガミがヴァジュラである。他のアラガミと違い、圧倒的なスピードとトリッキーな動きで神機使いを翻弄する。
「…タツミさんたちを呼んで下さい。私が引きつけます。このままだと分が悪い。」
「一人で大丈夫か？」

「年下とは言え、神機使いとしては先輩ですから！」
ヴァジュラが臥せ、うなり声を上げる。カノンは自分の神機を構え、ヴァジュラと睨み合った。
「さあ！」
「わ、わかった！」
キョウヤはポーチの中から一本の紙の筒と、マッチを取り出した。
ヴァジュラがキョウヤに襲いかかる。それを、カノンが火炎放射で阻止する。
「あんたの相手はあたしだって！」
その隙に、キョウヤが筒を地面に立て、火を付ける。筒から、目立つ色の発煙弾が上がった。これが緊急集合の信号だ。
「カノン、待たせた！」
「じゃあ早く！あたし弾切れ！」
ヴァジュラの一撃を、ギリギリかわしながらカノンが叫ぶ。
キョウヤは神機を銃形態に換え、ヴァジュラの頭に弾丸を放つ。しかし、冠状の頭部に、その弾は弾かれた。
「何してる！フツーの弾撃つんなら胴体狙え！」
「ね、狙えるか！」

カノンの怒号が飛んでくる。一応試すも、弾は悉く頭とマントのような器官に跳ね返された。

キョウヤも弾切れになった頃、タツミとコウタが合流した。

「一帯のオウガテイルは掃討した！無駄に消耗するな、退くぞ！」

タツミが閃光弾を投げ、ヴァジュラが目を眩ます。

その内に、四人は撤退した。

第十一話　Ｃｏｗｂｏｙ.（後書き）

ブレンダン・バーデル（２２）

第二部隊のバスターブレード使い。真面目過ぎる性格から、タツミからは「ブレ公」とか、「ブレンダン先生」とか言われている。

第十二話　Ｄｉｖｉｎｅ　ｇｅｎｅ．（前書き）

皆様いかがお過ごしでしょうか。

私は寒さと乾燥にやられ、鼻が詰まって呼吸が止まったり、喉が燃えるように痛かったりと、散々です。

十二話、はっじまっるよーっ。

第十二話　Ｄｉｖｉｎｅ　ｇｅｎｅ．

ガタゴトと揺れる車の上で、キョウヤは思い返す。

―――あのヴァジュラと言うアラガミ、見たことがある…。
文献とか、そんな情報の範疇で、ではなく、この目で見たことがある気がする。
そういえば、この間サクヤさんとの初任務の時にも会った…か…？
いや、あれは黒かった。それに、そんな新鮮な記憶ではなく、意識の奥底で…。
もっと間近で…。

記憶にフィルターがかかったみたいに、全然思い出せない…。
過去に遭った襲撃は、全部覚えているはずなのに。
忘れるはずが無いのに。

…現実の記憶じゃないのか…？
なら、夢の中で？見たことも無いアラガミを、夢で…？

…ん…待てよ、夢…？

もうひとつ、何か忘れてることがあるぞ…。

…夢の中で、俺は…―――

「キョウヤ！おい！」

目の前に、覗き込むコウタの顔。

「おっ…、おお…、どうした？」

「どうしたじゃないよ、もうアナグラに着いたぜ？」

言われて見れば、辺りの景色は地下駐車場。タツミたちは、荷物を降ろし始めている。

「ああ…、考え事してた。悪いな。」

「今日はどうしたの？朝もそんな感じだったし…。」

コウタが心配そうにキョウヤを見る。

「いやいや、本当に何でもないから。ちょっと思い出せないことがあってモヤモヤしてるだけだ。」

キョウヤは心配をかけないように、陽気に振る舞った。

「ふーん…。何か心配事あるんなら、相談しろよな！力になれないかもしれないけどさ。」

「おお、頼もしいな。」

そうコウタに返し、これ以上の心配をかけないように笑ったキョウヤは、自分の神機を背負って、駐車場の出口へ行ってしまった。

「…どうしちゃったんだよ、キョウヤのヤツ…。」

コウタと共に食事を済ませた後、キョウヤはセノを見舞いに、病室へ足を運んだ。今日はコウタは来ていない。あまり講義中に居眠りばかりするので、補講を賜ったそうだ。

病室の扉を静かに開けるキョウヤ。室内は静まり返り、心拍数を刻む機械だけが、一定のリズムで動いていた。
その隣で、包帯に身を包んだエリックが、寝息をたてている。

（エリック…よく寝てるな。一昨日意識が戻ったらしいけど…。）

キョウヤは向かい側のベッドを見た。いつもなら、セノが壁にもたれかかって本を読んでいるはずだが…。

（あれ？セノがいない？）

ベッドにセノの姿は無かった。不思議に思ったキョウヤは、なんとは無しに病室の奥の医務室へ向かう。

そこには椅子に座ってタバコを吹かし、何かの書類に目を通す、あのセノの担当医がいた。

「…あの、先生。セノは…？」

「うわぉ！ビックリした！急に声をかけないでくれ、こう見えて小心者だから！…うん。」

オーバーリアクションと言っても過言では無いほど、医師は驚いた。キョウヤは「すみません」と一言謝って、医務室に入ろうとした。

「あー！待った待った、ストップ！そっからこっちへ入るな！」

医務室への入室を頑なに拒む医師。キョウヤは疑問を隠せなかった。と言うのも、つい昨日までは入室を拒否されなかったからだ。

「え、何でですか…？」

「えーと、うん、ほら、大事な書類が散らばってるから！患者のデータは人に見せるもんじゃないだろ？うん！」

この焦り方は、何かを隠している焦り方だ。キョウヤは直感的に気付いた。自分に伏せておきたいことと言えば…

「セノになんかあったんですか！？」

「え？あ、うん、違うぞ？セノは関係ない、関係ない。」

つくづく演技の下手な人だな、とキョウヤは思った。声が上擦り、目も泳いでいる。

「ベッドにセノがいないんですよ！何があったんですか！」

「…あ、そっちか…。うん、やっぱセノはＡＳＤだったよ。今日の午後から復帰できる。今は自分の部屋に行ってるんじゃないか？」

「…何だ、良かった…。」

キョウヤは胸をなで下ろした。しかし、どうも先ほどの医師の挙動が気になる。

「別に隠してたワケじゃ無いからな？うん、言うタイミングが無かっただけだ。」

「それじゃあ…、どうしてあんな取り乱してたんですか？」

「えっ…。あー、あれは…、そう！別件と勘違いしてだな！」

わたわたと忙しない動きで取り繕う医師。見た目とのギャップが、どこか可愛い。

だが、彼女はそう答えた後に、何か思う所があったのか、ピタリと動きを止め、頭を掻きながらキョウヤに切り出した。

「…いや…、やっぱ言っとくわ…。お前、なかなか鋭そうだし…。うん、セノの事を真摯に考えてやってるもんな…。」

「…え？」

医師は机の上に広げた書類のうち何枚かを、キョウヤに差し出した。

「これ、セノのメディカルチェックの資料と、療養中の再検査の資料。」

「そうですか…。俺が見てもさっぱり…。」

「これ見て。」

医師は書類のグラフを指差した。波打ちながらも一定の間隔を保つ赤い線と、大きくブレる青い線。

「赤い線が、神機と人体を対応させるためのＰ５３偏食因子が放つ細胞質互換性パルスの…うん、いいや、簡単に言おう。人体に摂取されるオラクル細胞の波長。…で、青い線がセノ自体の細胞の波長。」

…つまり、セノの細胞はあまり神機との適合率が高くない、ということを指すのだろう。

「これはいいんだ、最初のメディカルチェックだから。みんなこんなもんだ。問題はこっちだ。」

医師はもう一枚の方の書類に書かれたグラフを指した。そこには、間隔も振れ幅もめちゃくちゃな、一本の紫色の線があった。

「…これは何のグラフですか？」

「さっきと同じ。再検査のときの適合率のグラフだ…。」

「え？線の色変わってますけど…？」

「変わってないよ。…ただ、線が重なってるだけだ…。」

「ああ、なるほど。つまり…どういうことですか…？」

「うん…セノの細胞が、Ｐ５３偏食因子と全く同じサイクルの波長を出してる。…もうこれは、『体がオラクル細胞に馴染んだ』だけで片付く問題じゃない。」

更に、医師はもう一枚の書類を取り出した。

「…見せたこと、内緒にしとけよ。これ、今まで支部内で一番適合率の高かったソーマのデータだ。」

そこにも、赤と青の波打つ線が二本。赤い線を、青い線が追いかけるように記されている。

「こいつのも大概だが、ゴッドイーターの理想の数値はこれだ。うん、要するに、人体の細胞に偏食因子の鼓動を真似させることによって、オラクル細胞に喰われないようにするんだ。…でも…。」

医師は、短くなった煙草を灰皿に押し付け、頭を抱えた。

「セノの細胞の打つ鼓動は、偏食因子の真似なんかじゃない。最早、偏食因子そのものの鼓動になってる。」

「…それって…？」

未だに理解しきれていないキョウヤの目を見据え、医師は真剣で厳しい口調で結論を放つ。

「セノの体は、既にアラガミと同じ構造になってるかもしれないってこと…。」

長い、沈黙。予想だにしていなかった結論を、キョウヤは未だに信じられないでいる。

「…ちょ、ちょっと待って下さいよ…。セノがアラガミ？」

「確信が持てたワケじゃないけど…うん。こんな測定値、見たこともないし…。ただ一つ確実に言えることは、あの子の体、普通じゃないってこと。」

「アナグラに来るまで、人並みにしかアラガミと接してないんですよ？…そんな事って…。」

「うん、だからさ、キョウヤ。あたしはちょっと研究させてもらうよ！うん、セノには定期的にメディカルチェックを受けに来てもらう事にする。」

医師が、今までの重たい雰囲気を振り払うように、陽気に言った。

「二人だけの内緒…ってワケにはいかないだろうけど、極力誰にも、セノ本人にも話すな。あたしも、周りに情報が漏れないようにするから。」

「…はあ…。」

「心配すんな！別にこれが悪い結果だって決まったわけじゃないん

だ。」

「…わかりました、俺も、何かあったら連絡します。」

とりあえず、話が一段落つき、キョウヤは医師に会釈し、医務室を去った。

複雑な気持ちを抱きながら…。

第十二話　Ｄｉｖｉｎｅ　ｇｅｎｅ．（後書き）

セノ…、どこへ向かうんだろう…。
色々とフラグ立てっ放しの件。

皆様、体調にはお気を付けて下さいね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0485q/

GOD EATER Links archetype.

2011年10月8日13時04分発行